金沢市

北塚遺跡・北塚古墳群

第17次発掘調査報告書

西部緑地公園テニスコート整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県金沢市北塚町地内に所在する北塚遺跡・北塚古墳群発掘調査報告書である。

2　本調査は西部緑地公園テニスコート整備事業に係る緊急発掘調査であり、石川県土木部公園緑地課の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地調査は平成９年５月６日～同年７月18日にかけて約650㎡を対象に行った。

4　発掘調査は西野秀和（調査第三課長）の指導の下、松浦郁乃・宮川勝次（調査第三課主事）が担当した。

5　発掘調査と報告書刊行にあたっては以下の機関に協力、助言をいただいた。
　石川県土木部公園緑地課　石川県金沢土木事務所　株式会社太陽測地社　石川県立埋蔵文化財センター諸氏、㈳石川県埋蔵文化財保存協会諸氏

6　本遺跡の出土遺物整理は平成９年度に直営で行った。戌亥久美子、池田くみ子、小村祐子、林　茂久、中村方宣（以上調査第三課補助員）の協力を得た。

7　本報告書の執筆は、第１・３章を宮川が、第２・４・５章を松浦が行った。編集は松浦が行った。

8　本書の図版・挿図については下記の通りである。
(1)　挿図中の方位は国土座標（第Ⅶ系）に基づく。
(2)　挿図中の水平基準は海抜高（m）で示した。
(3)　挿図の縮尺については各図中に表示した。
(4)　写真図版の遺物番号は挿図中の番号と同一である。
(5)　写真図版中の遺物の縮尺は不統一である。

9　本調査の記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。

目　　次

第１章　位置と環境
第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 …… 5
第２節　調査の経過 …… 6

第３章　遺　　構
第１節　遺 構 図 …… 7
第２節　遺構の概要 …… 13
第３節　Ａ区の遺構 …… 13
第４節　Ｂ区の遺構 …… 17
第５節　Ｃ区の遺構 …… 20

第４章　遺　　物
第１節　概　　要 …… 22
第２節　土　　器 …… 22
第３節　石器・井戸側 …… 23

第５章　お わ り に …… 28

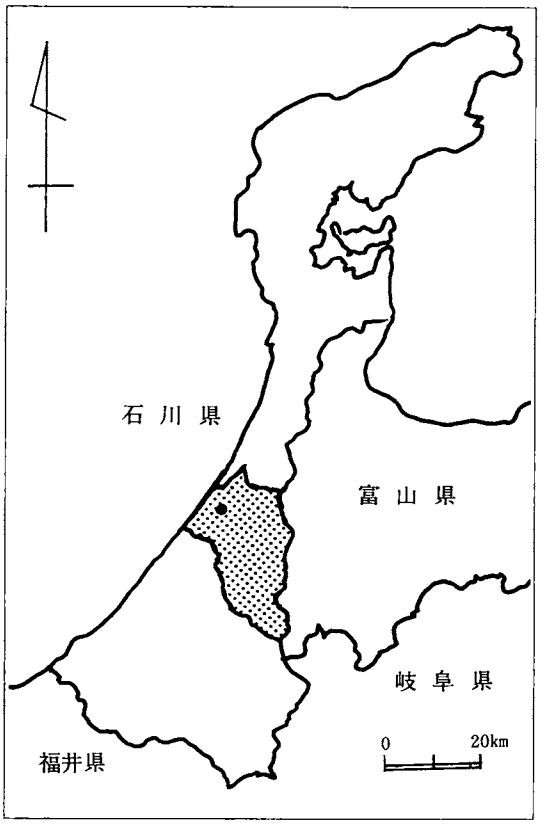
報告書抄録

図 版 目 次

第１章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

本報告の北塚遺跡は、石川県金沢市北塚町に所在する縄文時代中期から中世にかかる複合遺跡である。石川県は、日本列島のほぼ中心に位置し、日本海に向かって南北に突出した能登半島、そして金沢平野、白山を主峰とする加賀山地から成り立っている。県内第一の都市である金沢市は県のやや南よりに位置し、東は富山県小矢部市・福光町、西は日本海、北は内灘町・津幡町、南は松任市・野々市町・鶴来町と接しており、金沢平野（石川平野・加賀平野とも言う）に立地する。



第１図　遺跡の位置

金沢平野は北東から南西方向に走り、その長さ約60㎞、幅約10㎞の狭長な平野である。犀川・浅野川・手取川等の諸河川が流れ、海岸には多くの砂丘（内灘砂丘・安原砂丘等）が発達し、今江潟・木場潟・柴山潟の「加賀三湖」、河北潟などの諸潟が形成されている。また、平野の中央部は、白山を水源とする石川県域で最も長大な手取川の沖積作用で形成された手取川扇状地によって占められている。

本遺跡は金沢市街の中心部から県道専光寺野田線を西へ約５㎞行き国道８号線との松島交差点からさらに西へ約500ｍを測る地点に位置し、北陸自動車道金沢西インターチェンジからは北方約１㎞にあたる。北には県立野球場と産業展示館が存在する。本遺跡は、手取川扇状地北端にあたり標高約５ｍを測る低平な金沢平野北部に占地し、最も近い安原海岸まで約３㎞であり、遺跡の北東１㎞には犀川・伏見川・十人川の合流地点が所存する。また、耕地整理以前の北塚地区には、「フルカワ」と呼ばれる伏見川や手取川の旧河道にあたる低湿地帯が存在し、その旧河道の氾濫などによって形成された微高地上に遺跡が立地している。

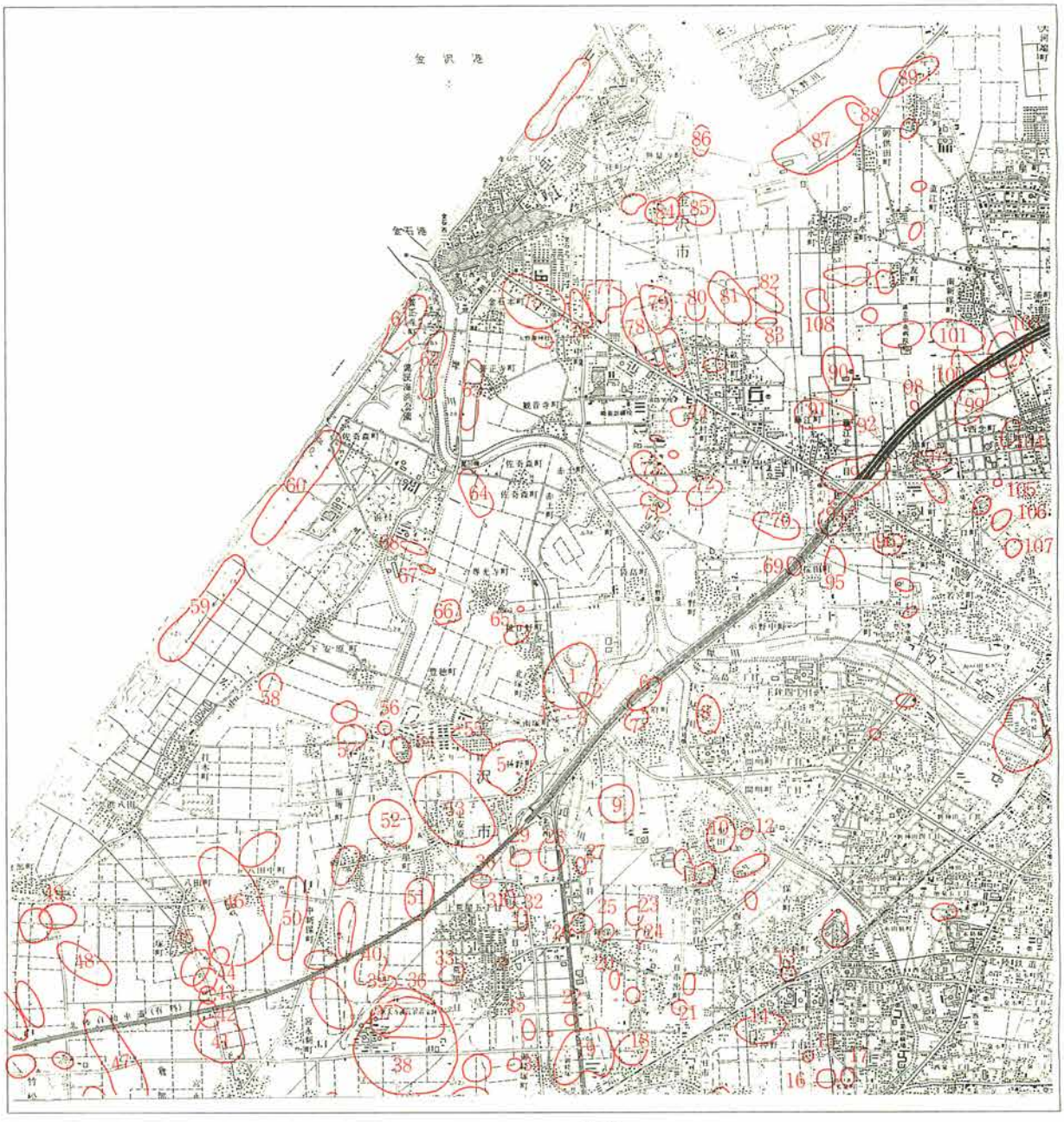
本遺跡の所在地である北塚町は、もとは北笹塚村と呼ばれていて、北接する南笹塚村（現・南塚町）などの数ヶ村と共に石川郡二塚村字笹塚に属していた。二塚という村名は、北笹塚にはおまる塚、南笹塚にはびわ塚と称する二つの古墳の存在が村名の由来になっている。そして、北・南両笹塚がそれぞれ北塚町・南塚町と名前を変えて現在に至っている。

第２節　歴史的環境

前節で述べた手取川扇状地には、本遺跡の他に数多くの遺跡が存在する。そこで、本遺跡に関連する縄文から中世の遺跡について述べていきたい。

旧石器時代や縄文時代の人々は、一般に山間に開けた台地や河岸段丘に集落を開いていたが、早くから沖積平野に進出した縄文の人々もいたようである。西約３㎞の下安原海岸遺跡（59）では、泥炭層下部の青色粘土層より縄文前期末に比定される土器片が出土している。また、南東約２㎞の古府遺跡（11）は、北陸地方の縄文時代中期中葉の標識土器である古府式土器の出土遺跡として著名である。後期後葉から晩期にかけては大規模な集落遺跡が出現してくる。南約1.5㎞の新保本町チカモリ遺跡（23）は、後期後葉の八日市新保式の標識遺跡であり、巨大木柱遺構が検出されたことでも有名である。南約2.5㎞には県下最大の集落跡として、また晩期前葉御経塚式の標識遺跡として著名な御経塚遺跡（19）があり、南西約２㎞には晩期中葉の中屋式の標識遺跡である中屋遺跡（51）がある。そして、南東約3.5㎞には、アンギン（編布）などの出土で知られる後期から晩期にかけての米泉遺跡（17）がある。

日本各地の縄文社会が大陸からの影響を受け始めて北部九州から西日本、東日本へと全国に農耕文化が波及していくにつれ、北陸にも影響が出始めてきた。その初期農耕文化を標識するものとして遠



第２図　周辺の遺跡

賀川系の前期弥生土器がある。石川県下での遠賀川系土器出土地は、金沢平野に限って言えば、北約4kmの戸水C遺跡（87）・南約1.5kmの矢木ジワリ遺跡（29）がある。前期から中期初頭は、柴山出村式の段階である。柴山出村式とは、柴山潟の東北岸にある柴山出村遺跡を標識遺跡としている条痕文系主体の弥生土器であり、野々市町の上林遺跡、南約1.5kmの上安原陸橋遺跡（30）、北約3kmの寺中遺跡（76）等がある。しかしながら、北陸に農耕文化が本格的に定着を見せるのは弥生中期でも後続の小松式土器の段階である。小松式土器とは、小松市八日市地方遺跡を標識遺跡としている櫛描文系の土器である。寺中遺跡は、柴山出村式から小松式にかけての遺跡であり、250基にも及ぶ土壙墓群が検出されている。中期後葉になると、戸水B式土器の標式遺跡として著名な戸水B遺跡（90）が北東約3kmに存在する。弥生末期に比定される月影式の段階に入ると下安原海岸遺跡、北東約4.5kmの南新保D遺跡（102）、北約3kmの無量寺B遺跡（84）等が中心となる。

古墳時代においては、初現期の遺跡として東約500mに古府クルビ遺跡（6）、同じく東約1kmに高畠遺跡（8）が存在する。古府クルビ遺跡は、祭祀的性格を有する石製有孔円盤や小形銅鏡片などの出土がみられ、高畠遺跡は土壙墓や車輪石・石釧・鍬形石などの碧玉製宝器が多数検出されていて玉作と墓域との係わりが考えられている。そして、北東約3kmの藤江B遺跡（93）でも管玉の未製品が検出されており玉造との関係がうかがえる。北約3kmの畝田・寺中遺跡（78）においては、古府クル

番号	遺　跡　名（時代）	番号	遺　跡　名（時代）	番号	遺　跡　名（時代）
1	北塚遺跡（縄文・弥生・古代・中世）	37	横江荘々家跡（平安）	73	松村A遺跡（縄文・古墳・中世）
2	北塚古墳群	38	横江A遺跡（縄文・弥生）	74	松村西の城遺跡（古墳・平安）
3	おまる塚古墳	39	中屋サワ遺跡（縄文・中世）	75	金石本町遺跡（弥生～平安）
4	宇佐神社古墳	40	下福増遺跡（縄文～古墳）	76	寺中遺跡（弥生）
5	びわ塚古墳	41	宮永B遺跡（縄文・古墳・中世）	77	寺中B遺跡（縄文～平安）
6	古府クルビ遺跡（弥生～平安）	42	宮永遺跡（古墳）	78	畝田・寺中遺跡（古墳～中世）
7	古府B遺跡（不詳）	43	旭小学校遺跡（弥生・古墳）	79	畝田遺跡（縄文～平安）
8	高畠遺跡（弥生・古墳）	44	一塚オオミナクチ遺跡（弥生）	80	畝田B遺跡（弥生～平安）
9	松島ナオサカ遺跡（平安・中世）	45	一塚墳墓・古墳群（弥生・古墳）	81	畝田C遺跡（弥生・平安）
10	黒田遺跡（古墳～平安）	46	八田中遺跡（縄文～古墳）	82	畝田・無量寺遺跡（弥生・奈良・平安）
11	古府遺跡（縄文）	47	竹松遺跡（弥生・古墳）	83	畝田ナベタ遺跡（奈良・平安）
12	黒田町三角点遺跡（古墳）	48	倉部B遺跡（弥生・古墳）	84	無量寺B遺跡（古墳）
13	西金沢新町遺跡（古墳）	49	倉部出戸遺跡（弥生・古墳）	85	無量寺遺跡（古墳・中世）
14	押野西遺跡（縄文・弥生・奈良・平安）	50	八田中ヒエモンダ遺跡（縄文・弥生・近世）	86	無量寺金沢港遺跡（縄文～古墳）
15	押野大塚古墳	51	中屋遺跡（縄文）	87	戸水C遺跡（縄文～中世）
16	押野大塚遺跡（縄文・弥生）	52	中屋ヘシタ遺跡（奈良～中世）	88	戸水C古墳群
17	米泉遺跡（縄文・弥生・平安）	53	上安原遺跡（古墳～平安）	89	近岡遺跡（縄文～古墳・平安・中世）
18	八日市B遺跡（縄文・奈良・平安）	54	緑団地公園遺跡（古墳・平安）	90	戸水B遺跡（弥生・平安）
19	御経塚遺跡（縄文・弥生・奈良～中世）	55	上安原緑団地遺跡（弥生・古墳）	91	藤江C遺跡（弥生～中世）
20	新保本町ツカダ遺跡（弥生）	56	緑団地下水処理場遺跡（弥生・室町）	92	藤江C古墳群
21	八日市サカイマツ遺跡（縄文・奈良・平安）	57	安原工業団地A遺跡（弥生・平安）	93	藤江B遺跡（弥生～平安）
22	御経塚C遺跡（古墳）	58	下安原遺跡（縄文・古墳・中世・近世）	94	藤江A遺跡（奈良・平安）
23	新保本町チカモリ遺跡（縄文）	59	下安原海岸遺跡（縄文～古墳）	95	出雲じいさまだ遺跡（平安）
24	新保本町東遺跡（縄文・古墳）	60	専光寺海岸遺跡（奈良・平安）	96	北町遺跡（縄文）
25	新保本町西遺跡（弥生・古墳）	61	普正寺番屋砂丘遺跡（縄文・奈良・平安）	97	二口六丁B遺跡（弥生・古墳）
26	森戸住宅遺跡（縄文）	62	普正寺遺跡（鎌倉・室町）	98	二ッ屋町遺跡（弥生・平安）
27	森戸本町遺跡（縄文）	63	普正寺高畠遺跡（古墳後期・鎌倉）	99	西念・南新保遺跡（弥生～平安）
28	森戸バイパス遺跡（古墳）	64	佐寄森遺跡（弥生・平安～近世）	100	南新保三枚田遺跡（弥生・古墳）
29	矢木ジワリ遺跡（弥生・古墳）	65	稚日野遺跡（縄文・古墳）	101	南新保C遺跡（古墳）
30	上安原陸橋遺跡（弥生・古墳）	66	吉藤専光寺跡（室町）	102	南新保D遺跡（弥生～平安）
31	矢木ヒガシウラ遺跡（弥生・古墳）	67	専光寺養魚場遺跡（古墳・平安）	103	南新保B遺跡（弥生）
32	矢木マツノキダ遺跡（弥生・古墳）	68	専光寺染色団地遺跡（古墳）	104	西念東遺跡（弥生）
33	上荒屋遺跡（縄文～平安）	69	桜田・示野中遺跡（弥生・平安）	105	西念クボ遺跡（縄文・古墳）
34	御経塚オッソ遺跡（弥生）	70	松村高見遺跡（弥生）	106	二口シミヅ遺跡（古墳）
35	御経塚シンデン古墳群	71	松村どのまえ遺跡（弥生）	107	二口町遺跡（弥生・古墳）
36	横江荘遺跡（奈良・平安）	72	松村B遺跡（縄文・弥生・江戸）	108	戸水大西遺跡（奈良・平安）

第1表　周辺の遺跡

ビ式期頃の周溝が検出され、北東約4.5kmの戸水C遺跡や南新保D遺跡、北東約3kmの藤江C遺跡（91）においても、初期の前方後方墳が数基確認されている。また、これら平野部だけでなく丘陵上にも古墳の築造が見られ、北東約10kmに位置する森本丘陵では、弥生後期からの七ッ塚古墳群を始めとして、前期から後期にかけて小坂古墳群や法華堂古墳群等が存在する。古墳後期以後の遺跡としては、古府クルビ遺跡において、6世紀後半頃の竪穴式住居跡が検出されており、また、北約2.3kmには普正寺高畠遺跡（63）が存在する。

古代の遺跡として、戸水C遺跡（87）では平安期の大型掘立柱建物や井戸と共に施釉、斎串、「津」等と読める墨書土器、地鎮祭に使用されたと思われる皇朝銭が出土している。北東約3.5kmの戸水大西遺跡（108）では、平安前期の漆絵の施された漆器や「宿家」と記された墨書土器などが出土している。藤江B遺跡では、9世紀頃の4×5間の大型掘立柱建物を始め、文献史料に登場しない初期荘園の1つと推定される「石田庄」と記された墨書土器が出土している。南西約2.5kmの上荒屋遺跡（33）においては、「綾庄」「東庄」を始めとする多くの墨書土器と共に、掘立柱建物が30棟程出土している。同じく南西約3kmの横江庄遺跡（36）では、庄家建物や計画的に配置された倉庫群などが出土しており、一部は国指定史跡となっている。そして、北約3kmの金石本町遺跡（75）では、奈良時代から平安前期にかけての大型掘立柱建物や横板井籠組井戸等が出土しており、戸水C遺跡をはじめとする、官衙的性格を持つ遺構・遺物は、国府との関連及び荘園史を考える上で貴重な資料である。

中世の遺跡としては、北約3kmの普正寺遺跡（62）・北東約5kmの近岡遺跡（89）があり、共に鎌倉末から室町期の港湾集落として位置づけられている。普正寺遺跡からは、五輪塔・板碑・銅製懸仏などの宗教関係の遺物や中国渡来の青磁・白磁、東海地方の常滑焼、そして、下駄・火鉢などの日常品も出土している。

〈参考文献〉

浅香年木他　『角川日本地名辞典』17　石川県　角川書店　1981年

若林喜三郎　高橋裕一監修　『石川県の地名』日本歴史地名体系17　平凡社　1991年

芳井先一編　『石川県大百科事典』　北国新聞社　1975年

藤　則雄　「石川県の自然と風土」『文化誌日本　石川県』　講談社　1988年

二塚郷土史編纂委員会　『二塚郷土史』　1987年

橋本澄夫著『日本の古代遺跡』石川　保育社　1990年

石川県立埋蔵文化財センター　『石川県立埋蔵文化財センター年報　第17号』　1997年

石川県立埋蔵文化財センター　『北塚遺跡群』　1985年

石川県立埋蔵文化財センター　『金沢市戸水C遺跡』　1986年

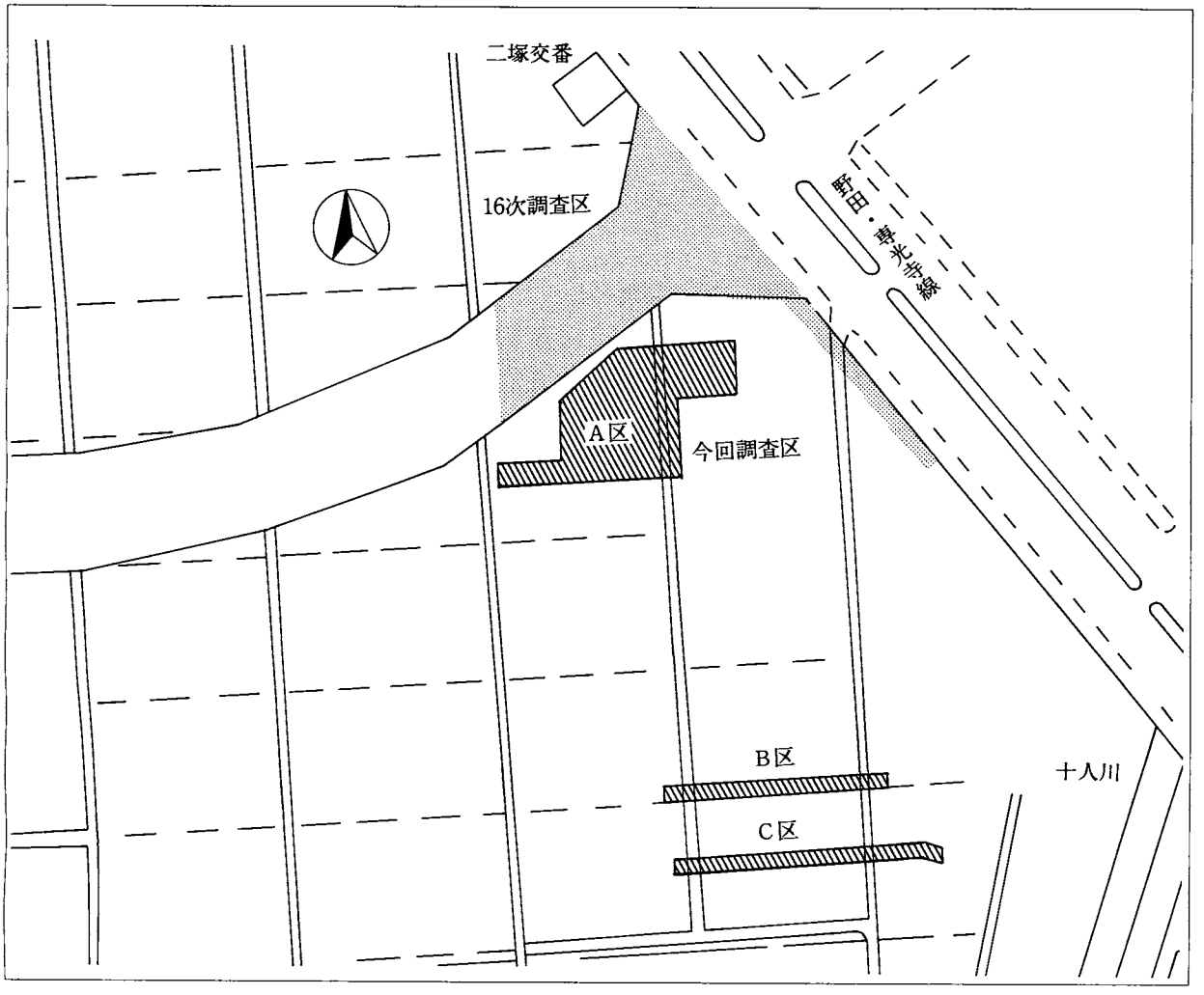
石川県立埋蔵文化財センター　『普正寺遺跡』　1984年

石川県立埋蔵文化財センター　『金石本町遺跡』　1997年

第２章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

金沢城址公園整備工事により金沢市丸の内地内にある県営テニスコートが、宮守堀復元のため平成10年に移転することとなり、同市北塚町地内にある、西部緑地公園に隣接して作られた仮設駐車場部分がテニスコート予定地となった。石川県教育委員会文化財課により平成９年２月24日に約26,000㎡を対象に試掘調査が行われた。その結果、約14,000㎡については周知の遺跡である北塚遺跡の一部と判明した。通算で第17次となる今回の調査予定面積は防風ネット部分と管理棟にあたる約500㎡の予定であった。しかし現地での打ち合わせを行ったところ、浄化槽の設置等で埋蔵文化財に影響を与える恐れのある部分が予定面積より広がる可能性が出てきた。そのため当初の予定を変更して、約650㎡について調査を行うこととした。調査箇所は仮設駐車場の造成時に約1.5mの盛土をしており作業中の危険防止のため調査区の壁には安全勾配をつけ、シートで覆うなどの対策を行っての調査となった。また現地への進入道路は道路工事中のため進入禁止となっていたが、石川県金沢土木事務所の協力により使用の許可が下りた。工事中の道路使用の際には、作業終了時にはバリケードを厳重に閉めること、工事が終了している部分についても検査前のため、重機の進入などに際しては傷を付けないように対応する、などの取り決めがなされた。



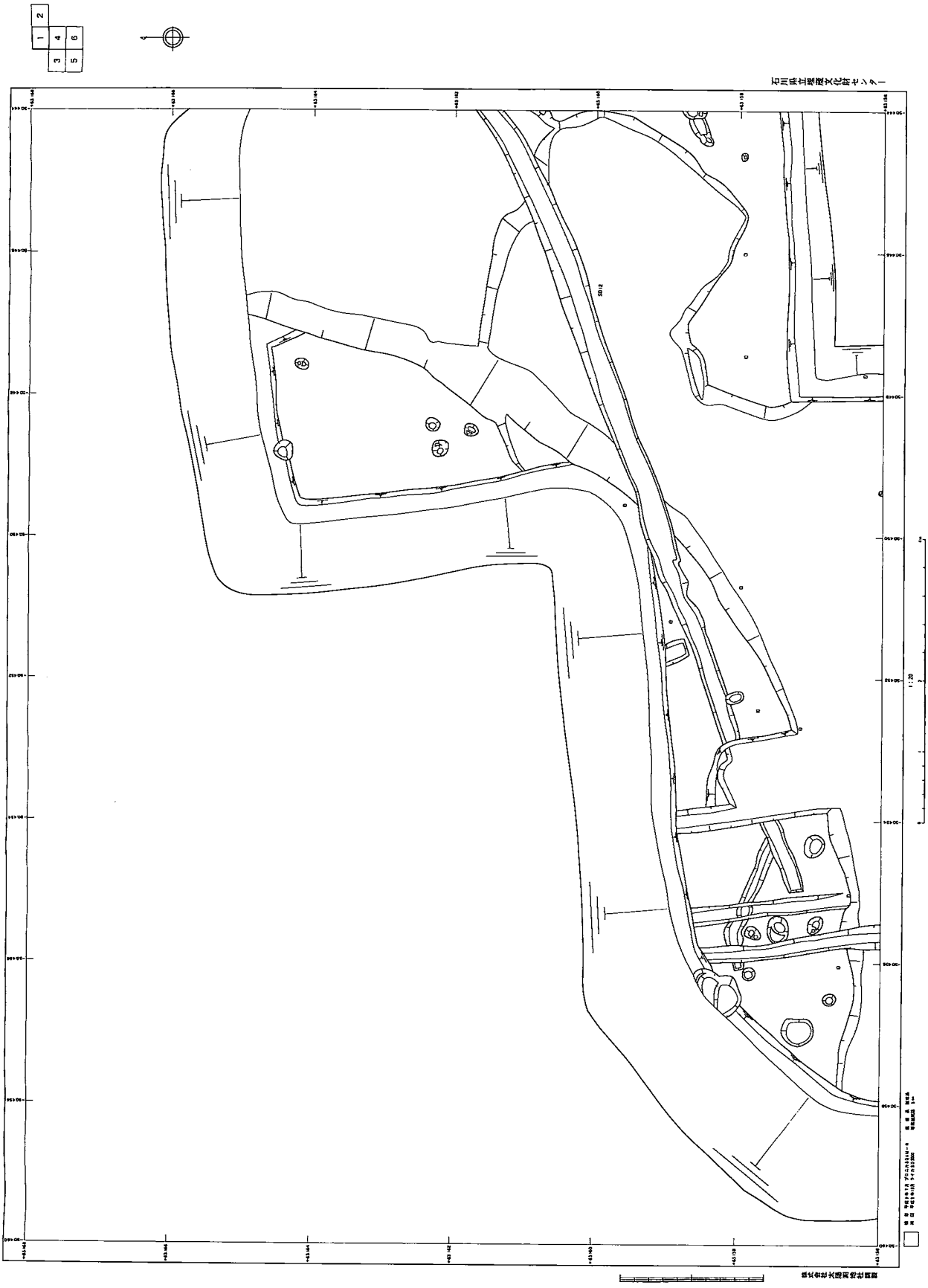
第３図　調査区位置（Ｓ＝1／12,500）

第2節　調査の経過

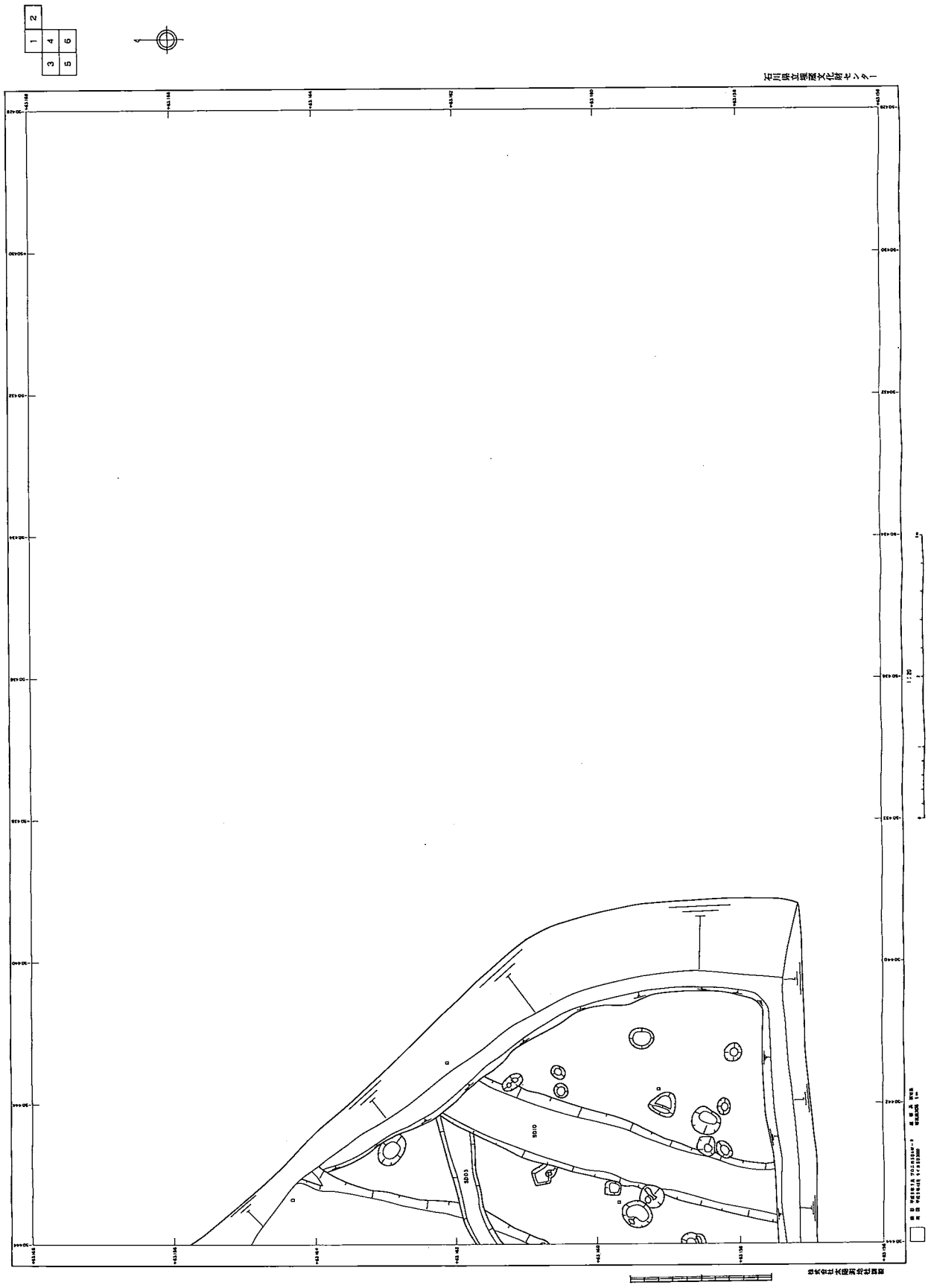
平成9年5月6日(火)晴	現地作業準備。現場進入路に砂利、鉄板を敷き詰める。
5月8日（木）曇後雨	バックホーによる表土除去作業開始。
5月9日（金）晴	表土除去作業。
5月12・13日(月・火)晴	機材・備品、搬入等の準備作業。
5月14日（水）雨	本日より作業員入れる。器材搬入・排水側溝の掘削・調査区域設定。
5月15日（木）雨後曇	表土除去作業。
5月16日（金）晴	表土除去作業。 C区遺構検出・B区調査区設定。
5月17日（土）晴	表土除去作業。
5月19日（月）晴	C区遺構検出及び掘削。 溝状遺構・土坑・ピット等を検出。
5月20日（火）雨	C区の遺構掘削　B区の遺構検出、溝状遺構・ピット等を検出。
5月21日（水）雨	調査区の杭打ち。
5月22日（木）曇時々雨	A区調査区設定。
5月23日（金）晴	B区遺構掘削、C区の写真撮影のため清掃作業。
5月26日（月）雨後曇	A区の遺構検出。周溝・河道跡・ピット等を検出。
5月27日（火）曇	杭打ち作業。
5月28日（水）晴	A区遺構検出及び掘削。
5月29日（木）曇	A区遺構掘削及び断面図作成。B区完掘写真撮影。
5月30日（金）晴	A区遺構掘削。
6月2日（月）晴	A区遺構掘削。A区礫群の平面図作成。
6月3日（火）晴	A区遺構掘削。
6月4日（水）雨	排水作業。
6月5日（木）晴	A区排水作業及び遺構掘削。
6月6日（金）雨後曇	B区SD10・C区SK01の土層断面図作成。
6月9日（月）雨後曇	A区遺構掘削。平面図作成及びレベル入れ。
6月10日（火）曇	A区遺構掘削、図面作成。
6月11日（水）曇	A区遺構掘削。
6月12日（木）晴	A区遺構掘削。
6月13日（金）晴	A区遺構掘削、遺物取上げ。
6月16日（月）晴	A区遺構掘削、B区一部拡張。
6月17日（火）晴	A区遺構掘削。
6月18・19日(水・木)晴	B区遺構掘削。
6月23日（月）晴	A区遺構掘削、B区拡張部分の土層断面図作成。
6月24日（火）晴	B区SE01の掘削。
6月25・26日(水・木)晴	B区遺構掘削、土器の洗浄。
6月27日（金）晴	図面作成。
6月30日（月）晴	排水作業。台風により、B区調査区一部が崩壊する。
7月1日（火）晴	B区井戸（SE01）の掘削。 A区遺構掘削及び周溝の土器平面図のレベル入れ。埋文センター、福島・中山氏来跡。
7月2日（水）曇時々雨	福島・中山両氏の協力のもと井戸の曲物を取り上げる。
7月3日（木）曇	A区航空写真測量の準備。
7月4日（金）晴	ラジコンヘリによる航空写真測量実施。
7月7日（月）曇	撤収準備（器材の洗浄・荷造り作業等）、B・C両調査区の平面図作成。
7月8日（火）雨	器材撤収。
7月10・11日(木・金)曇	B・C両調査区の平面図作成。
7月14日（月）曇時々雨	備品の引き取り、トイレの汲み取り。B・C両調査区の平面図作成及び、レベル入れ。A区埋め戻し作業。
7月15日（火）曇	B・C区の埋め戻し作業。
7月17日（木）曇	進入路の砂利・鉄板の撤去。

第3章 遺　　構

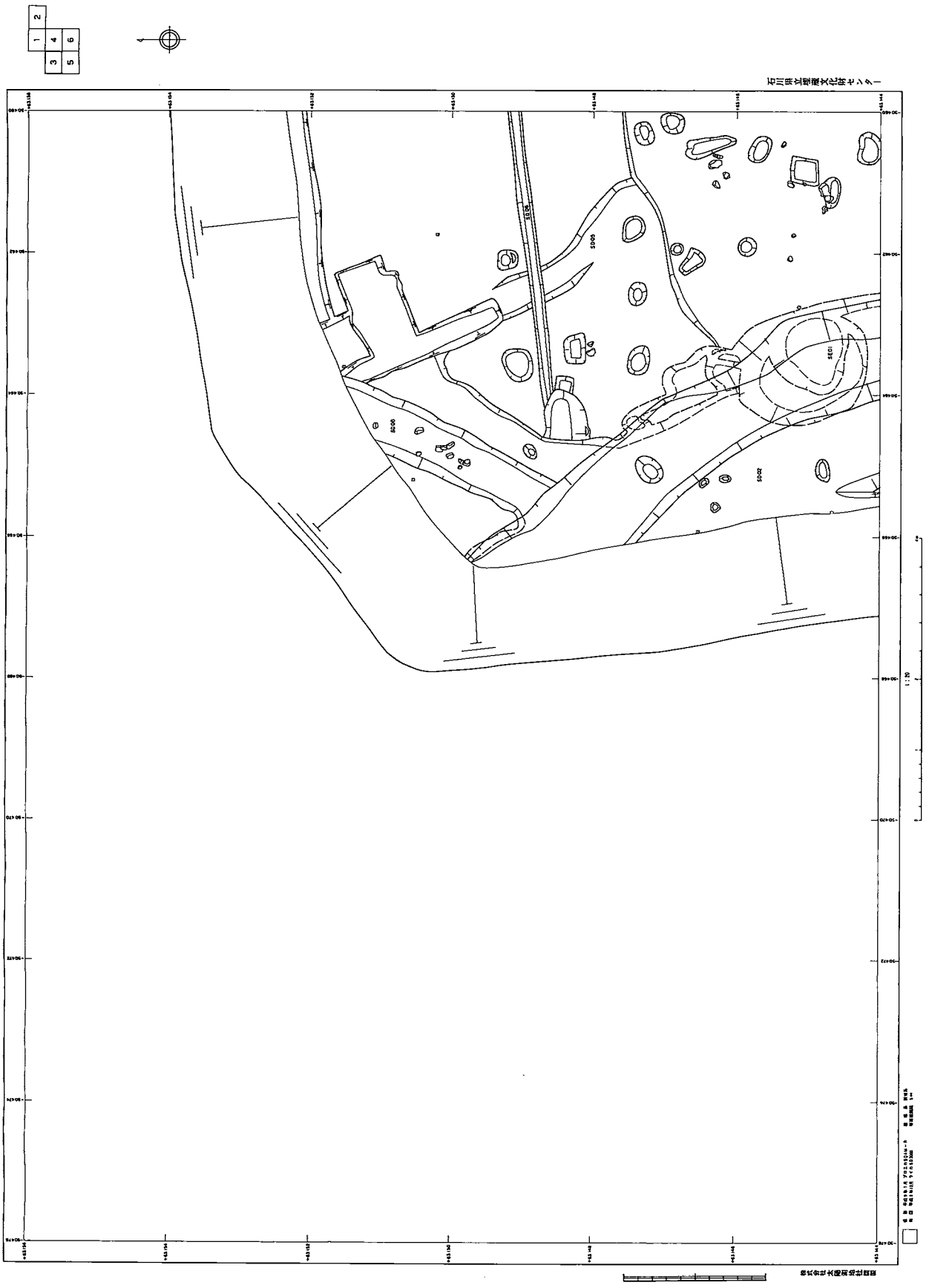
第1節 遺 構 図



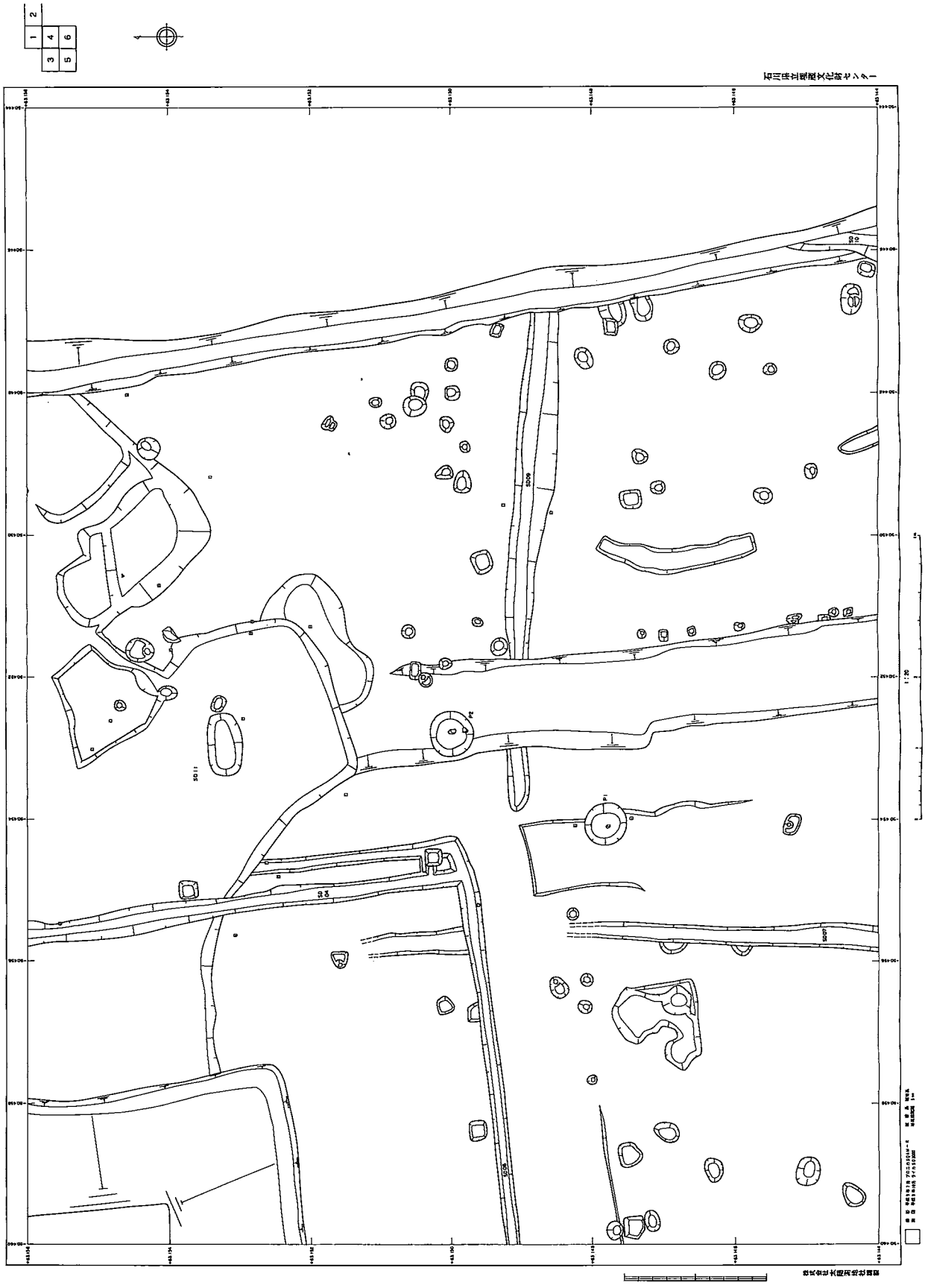
第4図　北塚遺跡第17次調査遺構図 No. 1



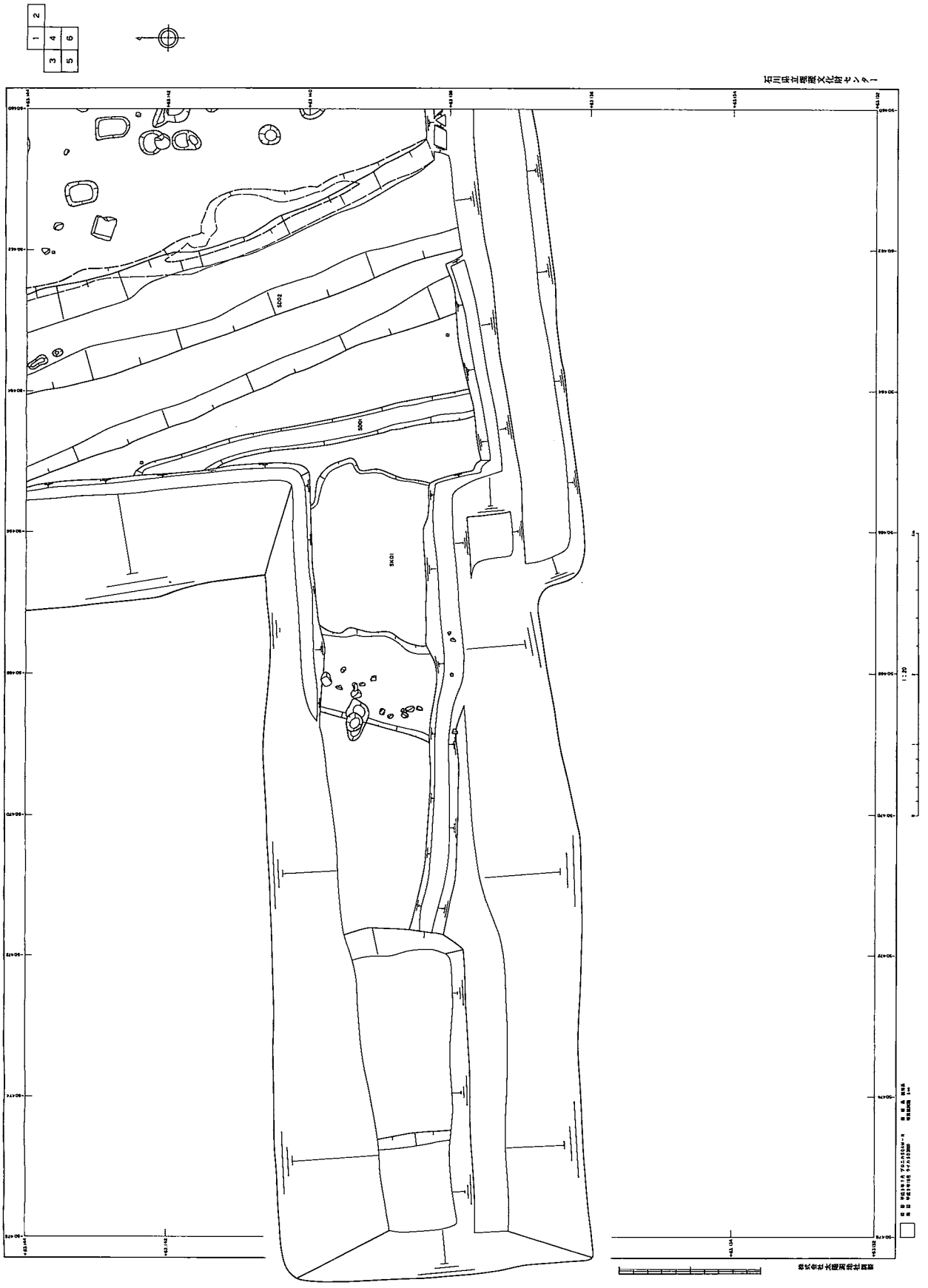
第５図　北塚遺跡第17次調査遺構図 No.２



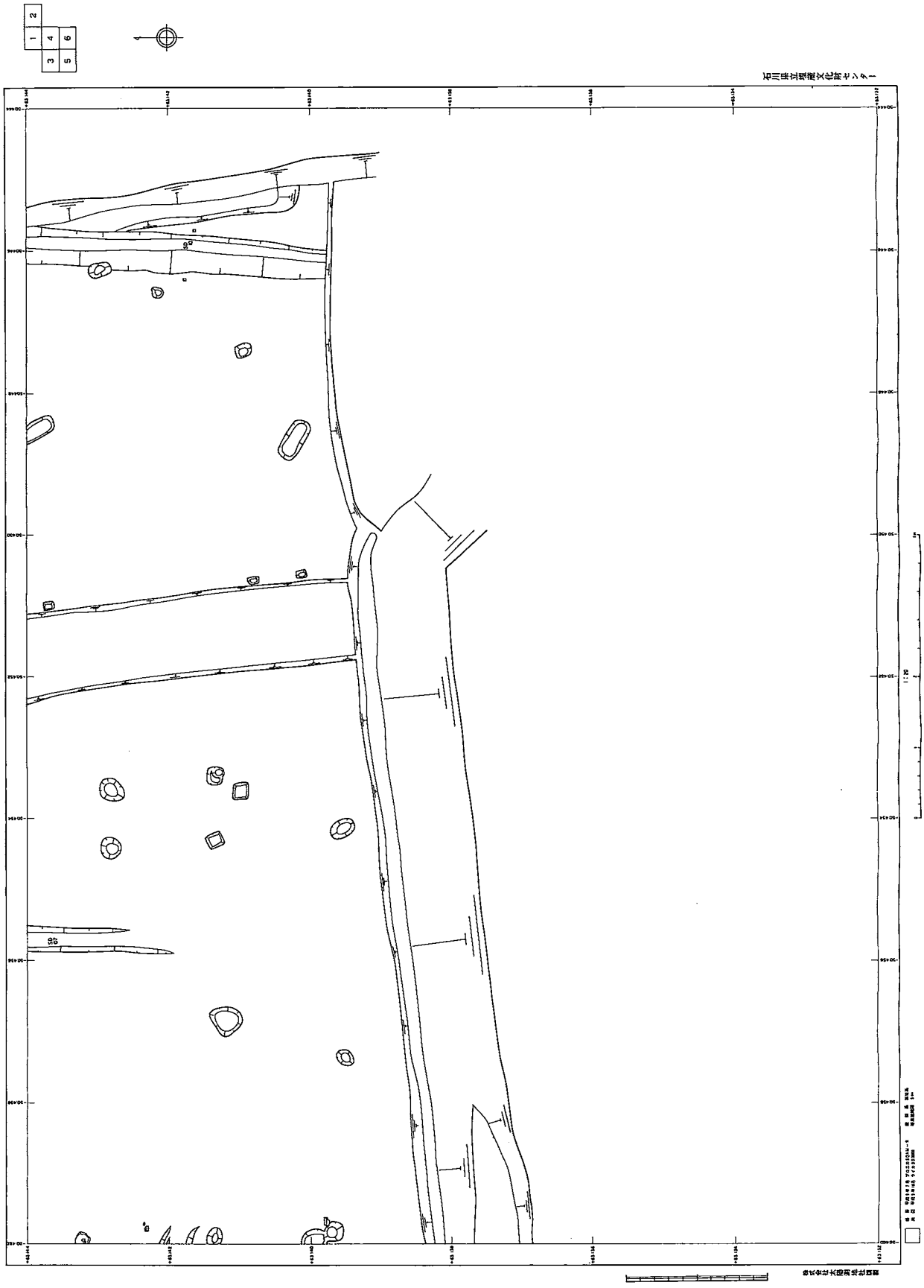
第６図　北塚遺跡第17次調査遺構図 No. 3



第７図　北塚遺跡第17次調査遺構図 No. 4



第８図　北塚遺跡第17次調査遺構図 No. 5



第９図　北塚遺跡第17次調査遺構図 No. 6

第２節　遺構の概要

今回の発掘調査において検出された遺構は、全体を通して標高約４～５ｍに立地しており、縄文時代から中世に属するものである。

３つに分けた調査区のうち北部に位置するＡ区は、東西約35ｍ・南北約25ｍのほぼ平坦面であり、古墳の周溝・井戸・溝・ピットなどが検出されている。トレンチ状のＢ区は、東西約40ｍ・幅約２ｍの調査区で、井戸・溝・土坑・ピットが検出されいてる。同じくトレンチ状のＣ区は、東西約45ｍ・幅約２ｍの調査区で、土坑・溝・ピットが検出されている。共に検出面レベルは、全体的にみて東より西が低くなっている。

地山は、黄灰色粘質土である。

第３節　Ａ区の遺構

１　溝

ＳＤ02（第11図、図版２・５）

調査区の西方に位置し南北を軸としている。北東から南西に軸を取るＳＤ08を切り込んで出来た溝である。上層と下層の２層からなり、上層は、上幅約1.2ｍ・深さ約0.2ｍ、下層は、上幅約２ｍ・深さ0.5ｍから0.6ｍを測っており、共に北から南にかけて低くなっている。覆土は、それぞれ茶褐色と灰色を基本とする。上層は１層から４層までと考えられ、下層は、人為的に地山質の粘土及びシルトなどにより埋められたものである。１個体３～10㎝程の大きさの礫群が、標高3.9ｍ～4.1ｍ程と4.3ｍ～4.5ｍ程より、溝の北部及び中央程から出土している。出土遺物から中世に属するものと思われる。

ＳＤ09（第11図、図版２）

調査区の東方に位置し、東西を軸としている。最大幅58㎝・深さ25㎝前後で、東側は、調査区外に延びる。西から東にかけて約10㎝低くなっている。断面形は船底型を呈し、覆土は褐色を基本としており、下層は、地山質土を多量に含んでいる。

ＳＤ10（第11図、図版２）

調査区の東方に位置し、南北を軸としている。上幅約60㎝・深さ約30㎝程度を測る。南側は調査区外に延びている。北側はＳＤ12（周溝）と並走し、調査区外へとさらに延びている。北から南にかけて約10㎝低くなっている。覆土は褐色を基本とし、下層は地山を多量に含んでいる。

ＳＤ12（第12図、図版３・４・５・６）

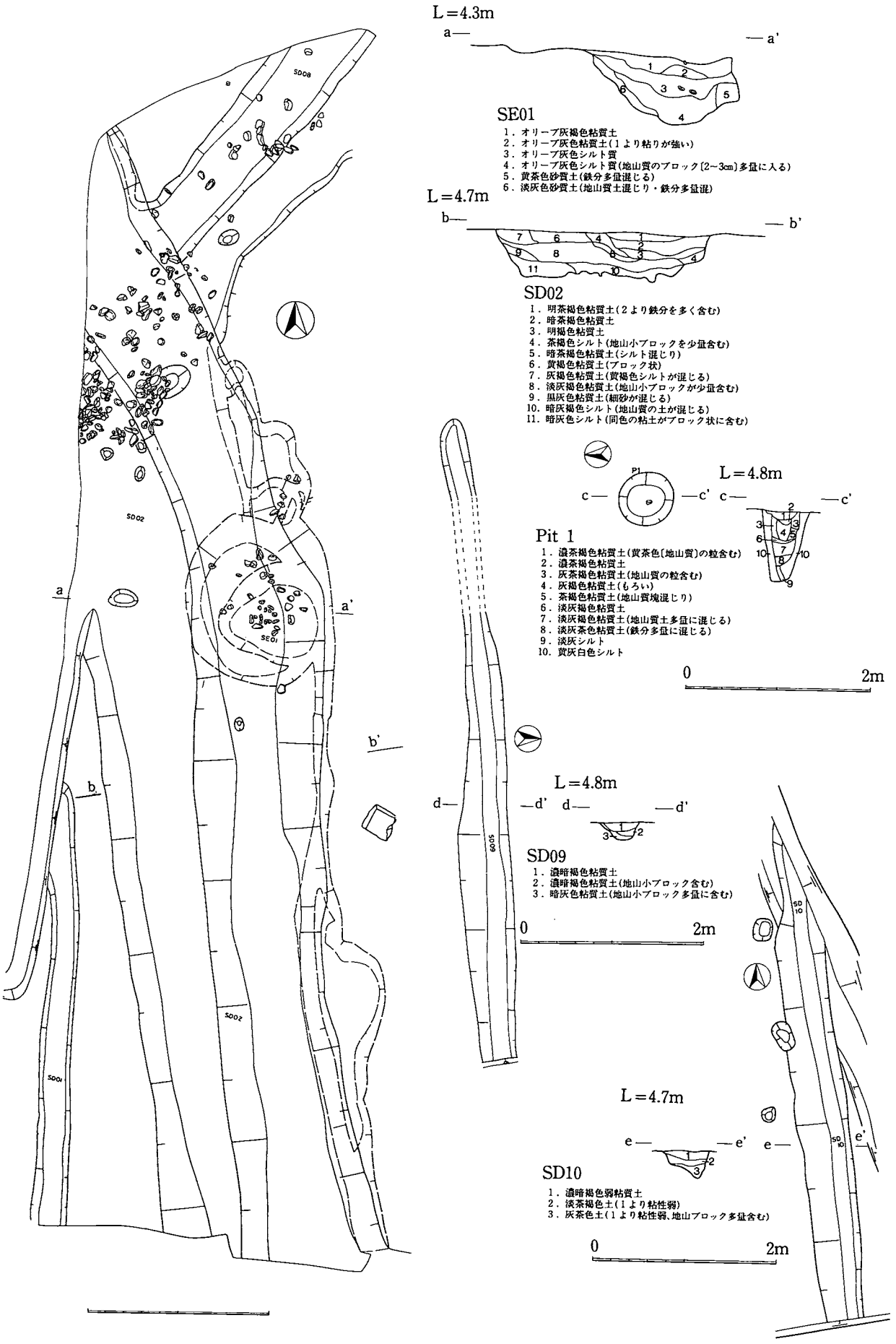
調査区北方に位置し、北方から西方に延びている古墳の周溝である。16次調査の時に検出された周溝とつながっており、それを考慮に入れると外径約23ｍ・内径約18ｍの周溝ということになる。周溝の床面は全体的に高低差はない。断面は逆台形を呈し、覆土は褐色を基本としており、下層のほうになると灰色や地山質土の混入がみられる。外径側の側壁は、全体的に内径側のそれより急な立ち上がりをみせている。甕形土器の口縁部や胴部等がまとまって出土しているが、２次的な混入とみられ、周溝の時期を特定できるものではない。

2　井　戸

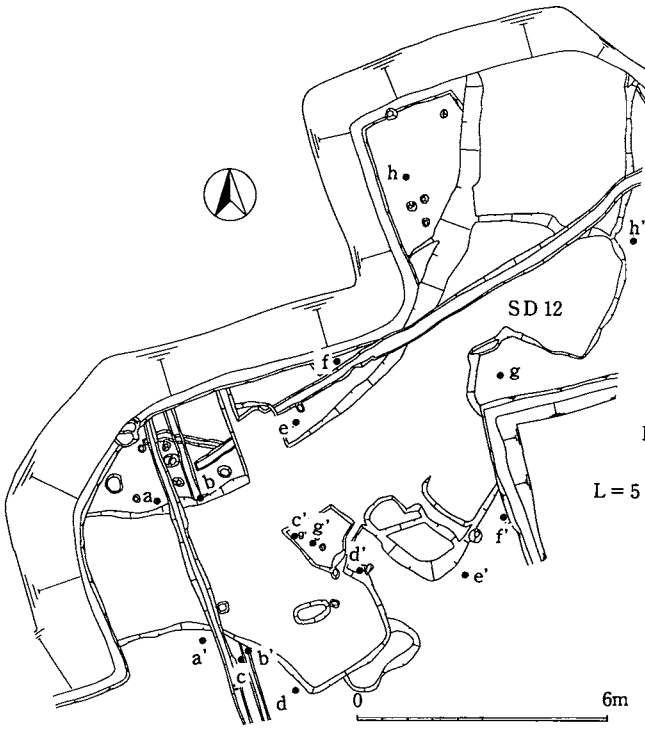
ＳＥ01（第11図、図版２）

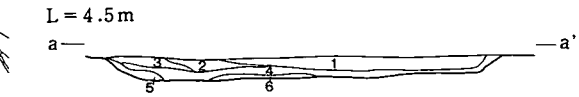
調査区西方、ＳＤ02の中央程に位置する。南北約1.8m・東西約1.6m・深さ約1.2mの楕円形を呈する。西側側壁は緩やかな立ち上がりをみせる。覆土は、上層からオリーブ灰色粘質土、同色シルトの順であり、東西側壁の立ち上がり部分は砂質土が流れ込んでいる。井戸枠は、抜かれていたか何かの原因で検出はみられないが、堆積土層から井戸枠の設置はあったように思われる。

第10図　Ａ区　調査区全体図（Ｓ＝1／200）

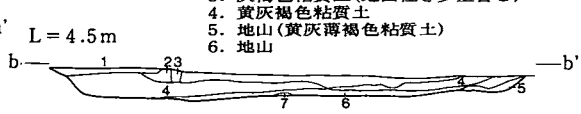


第11図　A区 遺構平面図・断面図（S＝1／60）

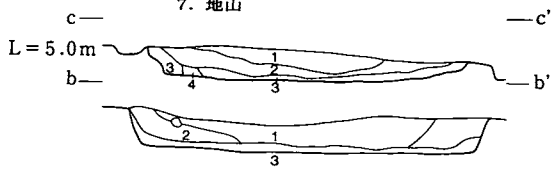




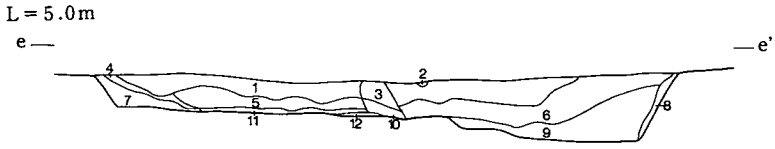
SD 12
1. 暗褐色粘質土(炭粒・鉄分含む)
2. 灰褐色粘質土(3より褐色度強い)
3. 灰褐色粘質土(地山粒を少量含む)
4. 黄灰褐色粘質土
5. 地山(黄灰褐色粘質土)
6. 地山



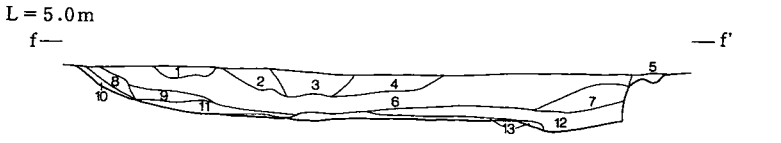
SD 12
1. 茶褐色粘質土(黒褐色塊混)
2. 茶褐色粘質土
3. 黒褐色粘質土
4. 褐色粘質土(地山粒含む)
5. 地山(黄褐色粘質土)
6. 黄灰褐色粘質土)
7. 地山



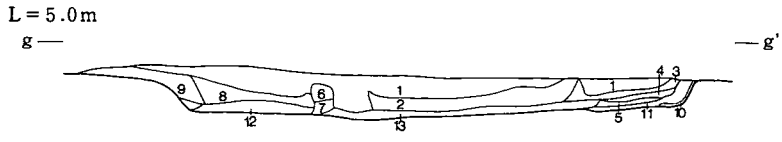
SD 12
1. 黒褐色弱粘質土(炭粒をごく微量含む)
2. 暗褐色粘質土
3. 灰茶色粘質土(粘性強い、地山小ブロックを多量含む)
4. 3と同じ(多量の地山混じり)



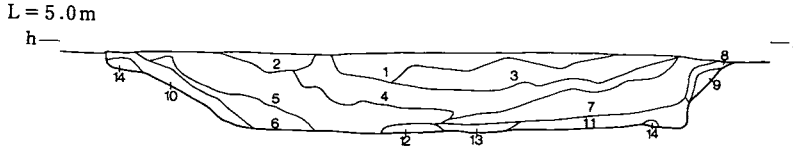
SD 12 (e-e')
1. 黒褐色粘質土(鉄分ごく少量含む)
2. 褐色粘質土
3. 褐色粘質土
4. 褐色粘質土(5より褐別度弱い、黄褐色粘質土粒混)
5. 褐色粘質土
6. 灰褐色粘質土
7. 黄灰褐色粘質土
8. 地山
9. 茶褐色粘質土(鉄分を多量含む)
10. 黄褐色粘質土
11. 灰褐色粘質土(地山を多量含む)



SD 12 (f-f')
1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土(1～4の区別は暗度により区別、3.1.2.4の順に暗くなる)
5. 黄灰褐色粘質度
6. 黒褐色粘質土
7. 茶褐色粘質土
8. 黄灰褐色粘質土
9. 褐色粘質土
10. 地山
11. 黒灰褐色粘質土(地山粒混)
12. 茶灰褐色粘質土(地山粒少量混)



SD 12 (g-g')
1. 暗褐色粘質土(鉄分含む)
2. 黒褐色粘質土
3. 黒褐色粘質土
4. 黄褐色粘質土
5. 黄灰褐色粘質土
6. 茶褐色粘質土
7. 黄灰褐色粘質土(地山粒少量混)
8. 茶褐色粘質土(地山粒、鉄分少量混)
9. 黄灰褐色粘質土
10. 地山
11. 灰褐色粘質土(地山粒多量混)
12. 茶褐色粘質土(地山、鉄分混)
13. 灰褐色粘質土(鉄分多量混、地山混)



SD 12 (h-h')
1. 明褐色粘質土
2. 明褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗茶褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土(鉄分混)
6. 茶褐色粘質土
7. 茶褐色粘質土
8. 黄灰褐色粘質土(褐色強い)
9. 黄灰粘質土(褐色混)
10. 茶灰褐色粘質土
11. 灰褐色粘質土
12. 灰褐色粘質土(13より地山粒、鉄分少なく、灰褐が強い)
13. 灰褐色粘質土(地山粒、鉄分少量混)
14. 地山

0　2m

第12図　A区　SD12平面図（S＝1／180)断面図（S＝1／60)

3　ピット

Ｐｉｔ01（第11図、図版５）

調査区中央に位置する。南北、東西共に約50㎝・深さ約75㎝の正円形を呈する。覆土は褐色を基本とするが、全体的に地山質土の混入がみられ、掘り方は、直径約30㎝・深さ約60㎝を測る。立ち上がり部分及び下層（９層・10層）はシルトが埋積している。

また、調査区東方には、直径約20～30㎝・深さ約20～50㎝のピット群が存在する。これらは、建物柱穴の可能性があるが、建物復元の際に柱穴が不足する等、その他（柵列など）の可能性も多分に含む状況である。

第４節　Ｂ区の遺構

1　溝（第13図）

ＳＤ13・14・15・16

すべて調査区の西方に位置し、南北に軸を取る。最大上幅が１ｍ（13・14）、1.6ｍ（15）、0.8ｍ（16）、深さ５～10㎝の浅い溝である。

ＳＤ17

調査区の中央程に位置する。南側は調査区外に延びており、北側は途中でＬ字形に折れ曲がり、西に延びている。幅約30㎝・深さ約３㎝の浅い溝である。

ＳＤ18

調査区の中央程に位置し、南北に軸をとる。上幅約40㎝、深さは南側が約10㎝で北に行くにつれ、浅くなっている。ＳＤ21を切っている。

ＳＤ21

調査区の中央程に位置し、北東－南西に軸をとる。幅約４ｍ・深さ約１ｍを測り、平坦な床面をもつ溝である。断面は逆台形を呈し、北東・南西それぞれの側壁は、共に同じ様な立ち上がりをみせている。覆土は褐色を基本としており、下層になると覆土自体が地山質土に近くなっている。しかしながら、全体的に地山質土の混入がみられ、人為的な埋め戻しが行われたと思われる。

2　土　坑

ＳＫ01（第13図・第14図、図版７）

調査区の中央程に位置する。深さ約20㎝のほぼ平坦面であり、礫群及び鉄滓の出土がみられる。もっとも礫群などの出土箇所は他の所より３㎝程低くなっている。

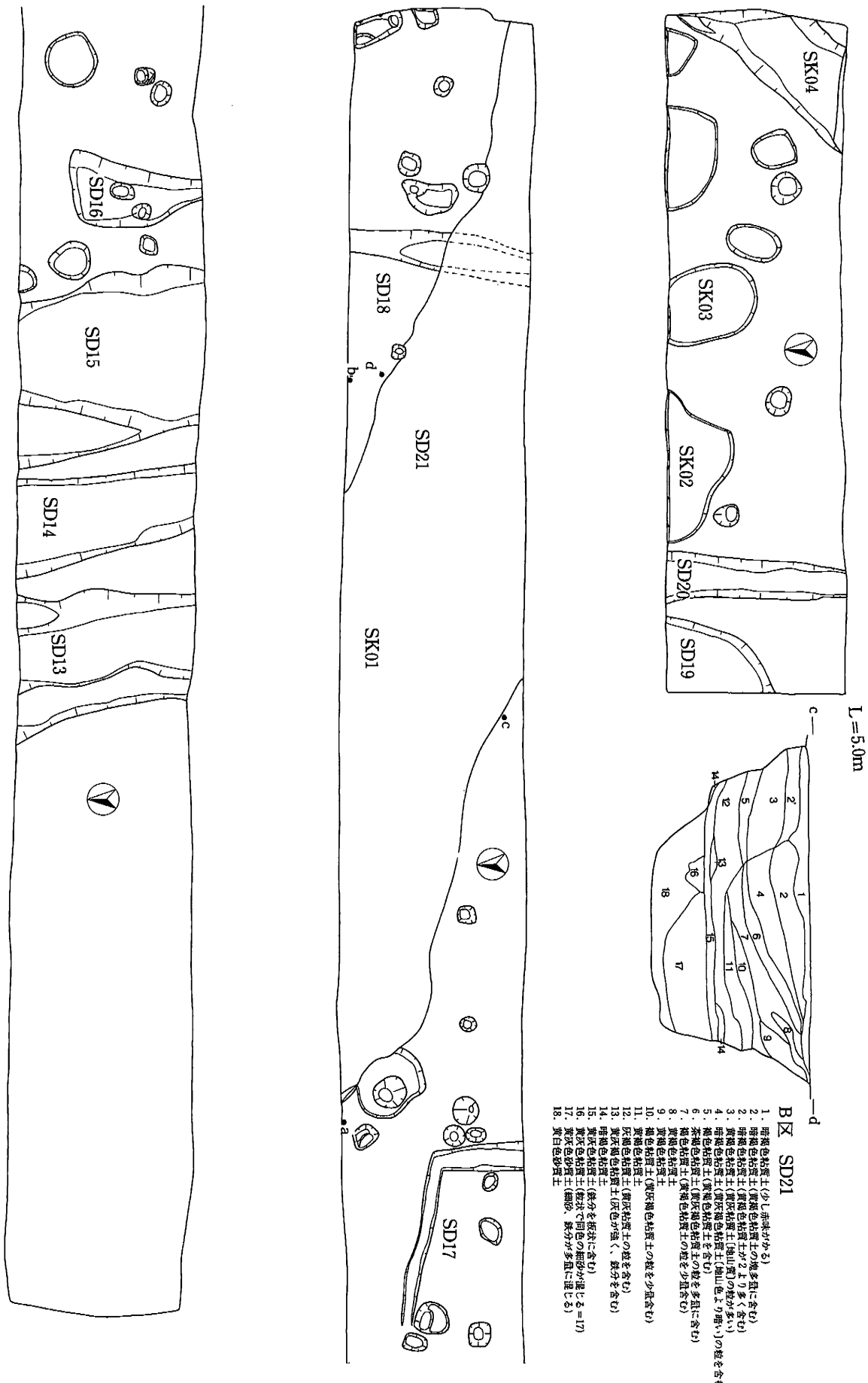
ＳＫ02・03（第13図）

調査区の東方に位置する。東西約1.6ｍ（02）、0.8ｍ（03）、深さ５㎝前後（02・03）と浅く、共に床面は平坦である。

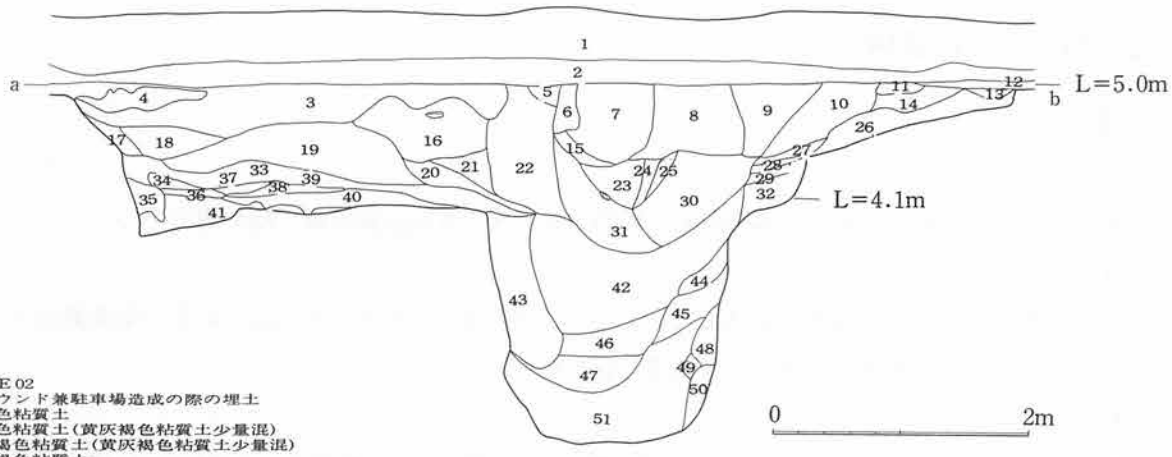
3　井　戸

ＳＥ02（第14図）

調査区の中央程に位置する。南北・東西共に約3.6ｍ、深さ約２ｍの略円形を呈する。先述したＳＤ21の埋め戻しの後、掘られたものであろう。覆土は褐色を基本としており、下層になるにつれ青灰色粘質土が基層となっていく。部分的に粗砂が混じっており、水が染みやすい状況である。また、下



第13図　B区 遺構平面図・断面図（S＝1／60）



第14図　B区 SK01 SE02 断面図（S＝1／60）

SK 01・SE 02
1．グラウンド兼駐車場造成の際の埋土
2．暗褐色粘質土
3．茶褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
4．濃茶褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
5．濃茶褐色粘質土
6．茶褐色粘質土
7．暗褐色粘質土（白灰褐色粘質土少量混）
8．茶褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
9．濃茶褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
10．茶褐色粘質土（黄灰褐色粘質土混）
11．濃茶褐色粘質土
12．茶褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
13．茶褐色粘質土（12より粘性強、黄灰褐色粘質土混）
14．黒褐色粘質土（黄灰褐色粘質土多量混）
15．濃茶褐色粘質土（白灰褐色、黄灰褐色粘質土少量混）
16．暗褐色粘質土（白灰褐色粘質土ブロック多量混）
17．暗褐色粘質土（黄灰褐色粘質土多量混）
18．暗褐色粘質土（黄灰褐色粘質土多量混）
19．暗灰褐色粘質土（白灰褐色、黄灰褐色ブロック多量混）
20．暗褐色粘質土（黄灰褐色粘質土、鉄分少量混）
21．暗褐色粘質土（黄灰褐色粘質土、鉄分少量混）
22．濃茶褐色粘質土（黄灰褐色、白灰褐色粘質土少量混）
23．濃茶褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
24．濃茶褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
25．暗褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
26．黄灰褐色粘質土（褐色粘質土少量混）
27．黒褐色粘質土（黄灰褐色粘質土少量混）
28．茶褐色粘質土
29．黒褐色粘質度
30．濃茶褐色粘質土（黄灰褐色・白灰褐色粘質土少量混）
31．茶褐色粘質土（地山質土小ブロック混）
32．黄灰粘質土（褐色粘質土混）
33．暗灰褐色粘質土（地山粒少量混）
34．暗褐色粘質土と黄白灰褐色土、ブロック状に半々）
35．灰褐色粘質土（暗褐色粘質土ブロック多量混）
36．灰褐色粘質土
37．白灰褐色弱粘質土
38．白灰褐色弱粘質土（鉄分多量混）
39．黄灰茶褐色弱粘質土（鉄分少量混）
40．黄茶褐色粘質土（地山土ブロック混、鉄分多量混）
41．黄灰粘質土（少し褐色がかる、鉄分多量混）
42．濃茶褐色粘質土
43．淡茶褐色粘質土（地山質ブロック多量混）
44．淡茶褐色粘質土
45．褐灰色粘質土（地山質ブロック混）
46．オリーブ褐色粘質土（地山質ブロック少量混）
47．オリーブ褐色粘質土（46層より粘性強）
48．褐灰色粘質土（地山質大ブロック多量混）
49．青灰色シルト
50．黄白色粘質土（粗砂混り、水がしみ出る）
51．濃青色粘質土（少し茶色がかる）

SE 02（曲物出土状況）

層の中央部分からは、井戸枠に使用されたと思われる曲物が出土している。中世に属するものと思われる。

4　ピット（第13図、図版８）

ＳＤ13以東よりみられ、直径20㎝前後のものから50㎝程のものが存在する。深さは10㎝以内のものが多い。調査区西方、ＳＤ16とＳＤ17の間に、東西軸で２間の掘立柱建物と思われるピット列が検出されている。幅２ｍの狭い調査区のため南北軸のほうは確認されておらず、柵列などその他の可能性も残している。このＰｉｔは、幅・深さ共に20㎝前後を測る。

第５節　Ｃ区の遺構

１　溝（第15図）

ＳＤ22

調査区の西方に位置し、南北に軸を取る。幅約20㎝・深さ５㎝前後の細く浅い溝である。

ＳＤ23

調査区の西方、ＳＤ22の東側に並走している。最大幅1.4m・深さ５～10㎝である。南北高低差より、東西高低差の方が大きく、西側が５㎝ほど低くなっている。

ＳＤ24

調査区の西方、ＳＤ23の東横に位置する。最大幅1.8m・深さ約４㎝を測る、床面が平坦な溝である。

ＳＤ25

調査区の中央程から西方にかけて走り、東西を軸としている。幅20㎝前後、深さ５～10㎝程である。

ＳＤ26

調査区の東端から中央程にかけて走り、西側は調査区外に延びている。長さ約21m、上幅40㎝前後・深さ５～10㎝前後で、緩やかな凹凸をもつ溝底である。

ＳＤ27

中央からやや東よりに位置し、ほぼ南北を軸としている。最大上幅90㎝・深さ30～40㎝前後を測り、北側が南側より10㎝ほど溝底が低くなっている。ＳＤ26に切られている。

ＳＤ28

調査区の東方に位置し、南北に軸を取る。上幅約30㎝・深さは10㎝前後を測り、若干南のほうが低くなっている。南側はＳＤ26に切られている。また、溝内には、一辺が15㎝程度、深さ約10㎝の方形型のピットが直列している。

ＳＤ29

調査区のほぼ東端に位置し、南北に軸を取る。最大上幅1.3m、深さ10～25㎝前後を測り、北から南に傾斜している。ＳＤ26に切られている。

ＳＤ30

調査区の東端に位置し、ＳＤ29と並走する。上幅約40㎝・深さは３～８㎝程と南が高くなっている。北側はＳＤ26に切られている。

２　土　坑

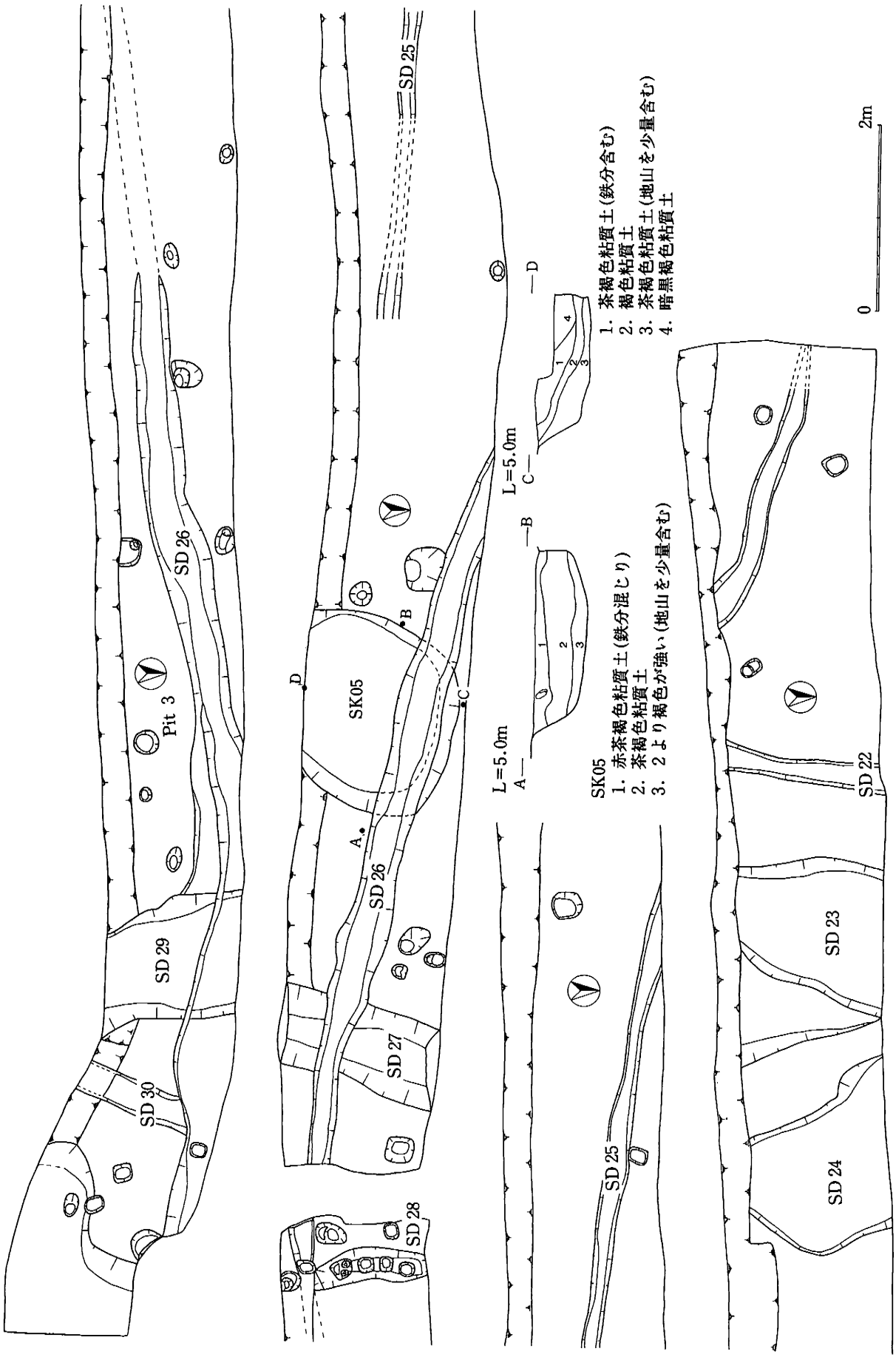
ＳＫ05（第15図、図版10）

調査区のほぼ中央程に位置する。南側は調査区外に少し広がると思われるので、それを考慮すると南北・東西共に２m、深さ0.5m前後の略円形もしくは隅丸方形を呈する。覆土は茶褐色を基本とするが、上層は鉄分、下層は地山質土の混入がみられる。北側はＳＤ26に切られている。

３　ピット（第15図）

Ｂ区と同様に直径20㎝前後のものを中心に50㎝ほどまで存在する。深さは、20・30㎝前後のものが多い。そのうち、南北約30㎝・東西約25㎝・深さ約30㎝のＰｉｔ３（図版９）において、直径約10㎝の土師器埦が上下逆になった状態で出土した。これは、建物を廃棄する際に祭祀行為として柱穴に納めたものと考える。

掘立柱建物など建物復元できるような柱穴は、質・量共に限界がある状況である。



第15図　C区 遺構平面図・断面図（S＝1／60）

第4章　遺　　物

第1節　概　　要

本調査で出土した遺物はパンケースにして約5箱と少量である。縄文時代中期～後期、弥生時代末～古墳時代前期の土器が中心となる。、平安時代、中世の遺物も少量ではあるが見られる。2次的混入によると思われる遺物が多く、出土状況は必ずしも良好とは言い難い。

縄文土器は、ほとんどが中期後葉に属するものと思われる。貝殻腹縁文によって施文される串田新式の土器がその多くを占め、後は葉脈状文・無文・縄文の土器が少量見られる。

第2節　土　　器

A区土器

河道出土土器（第16図1～16）　A区の河道より出土した縄文土器である。出土した縄文土器は縄文時代中期から後期にかけてのものがみられる。1は半截竹管を使用して引かれた半隆起線によってできた区画内を縄文で充塡している。内外面とも黒く煤けている。2は口縁部に貝殻腹縁文をもち、腹縁文下に沈線が入る。3は緩やかな渦巻状文の隆帯を入れ、細い棒状具により隆帯上に刻み目をいれる。外面には炭化物がこびりつく。4は口縁部に平行した隆帯を入れ、その上に縦位の短沈線を施す。5は口縁部に近い部分で、工字状文。3のような貝殻腹縁文が口縁部につくと想定される。6は縄文地に半截竹管でなでるように施文する。荒い縄目の原体を転がす。7・8は無文の平口縁だが、8は器面を指なで後に柔らかい植物質のもので再度調整しているようである。9は大杉谷系の深鉢口縁部と思われる。胎土中に2㎜程度の炭化物と見られる粒を含む。河道から出土した縄文土器で黒い炭化物粒が入るのはこの土器のみである。10は口縁より1段の無文帯をもうけその下を縄文をころがす。11は撚糸文による施文が行われる。12・13は深鉢底部で網代圧痕がつく。14は2と同じく口縁部に貝殻腹縁文をもつ。15は葉脈状文の支脈部分。内外面に隆帯を持つ。16深鉢の底部。立ち上がりの部分にも縄目が見られる。底部には平行に入る圧痕が見られる

17はＳＤ02より出土した。2・14と同じ施文の口縁部を持つ。半截竹管により縦位に短沈線を施すため半月状に見える。18は須恵器の杯。8世紀半ばと思われる。19は外反する口縁を持つ青磁碗。15世紀前半と思われる。

B区土器

ＳＤ18出土土器（第16図20）　平口縁の浅鉢。外面は無文である。口唇部は2重に段をもつ。緻密な胎土をもち丁寧な作りをしている。

ＳＤ21出土土器（第16図21～28）　21・22・23は須恵器の杯蓋。21は8世紀後半以降、22は8世紀末、23は9世紀前半と思われる。25は非ロクロ成形の土師器椀。口径約11㎝、器高約3.0㎝である。14世紀前半代。27も非ロクロ成形の土師器椀。口縁部の横ナデにより外反させるため、体部下半に稜が入るタイプ。口縁部は残っていないが口径7～10㎝、器高は2～3㎝のものが通常みられるもののようである。15世紀前半代と思われる。24は美濃産と思われる灰釉陶器。口径6.5㎝、器高1.8㎝の小型杯で通常灰釉に多くみられる器種ではない。外面が黒変している。時期は特定出来ないが9世紀前

半代と思われる。28は加賀焼の甕。

Ｃ区土器

ＳＤ26出土土器（第16図）　30は口径約13㎝、器高約2.5㎝の土師皿。13世紀前後と考えられる。

ＳＫ・Ｐｉｔ（第17図）　31はpit3から逆位の状態で出土した土師器の椀。口径10.4㎝、器高2.9㎝、底径4.3㎝を計る。ロクロ成形で底部に回転糸切り痕を残す。時期は11世紀前半代、Ⅶ２（新）期と考えられる。32は回転糸切り痕を残す土師器の底部。11世紀後半か。

ＳＤ12出土土器（第17図）　ＳＤ12からは縄文時代から古墳時代初頭にかけての遺物が出土した。33は縄文時代後期前田式と思われ、頸部より真っ直ぐに外反する口縁を持つ。頸部に３条の沈線を引き、沈線間に列点を施文する。34から36は弥生時代終末期の土器。いずれも摩滅が激しい。口縁部に擬凹線がほどこされる。37から41は古墳時代前期、漆町の９・10群と考えられる布留式甕。頸部より胴部はハケによる調整が行われる。いずれも煤が付着する。内面はケズリが施され、口縁端部は肥厚する。42は甕の底部。かなり器壁が厚い。出土地点はほぼ同じであったが、37から41までの口縁のいずれかと同一個体とは考えにくい。大型の甕の底部であると考えられる。

第３節　石器・井戸側

石　器（第17・18図）

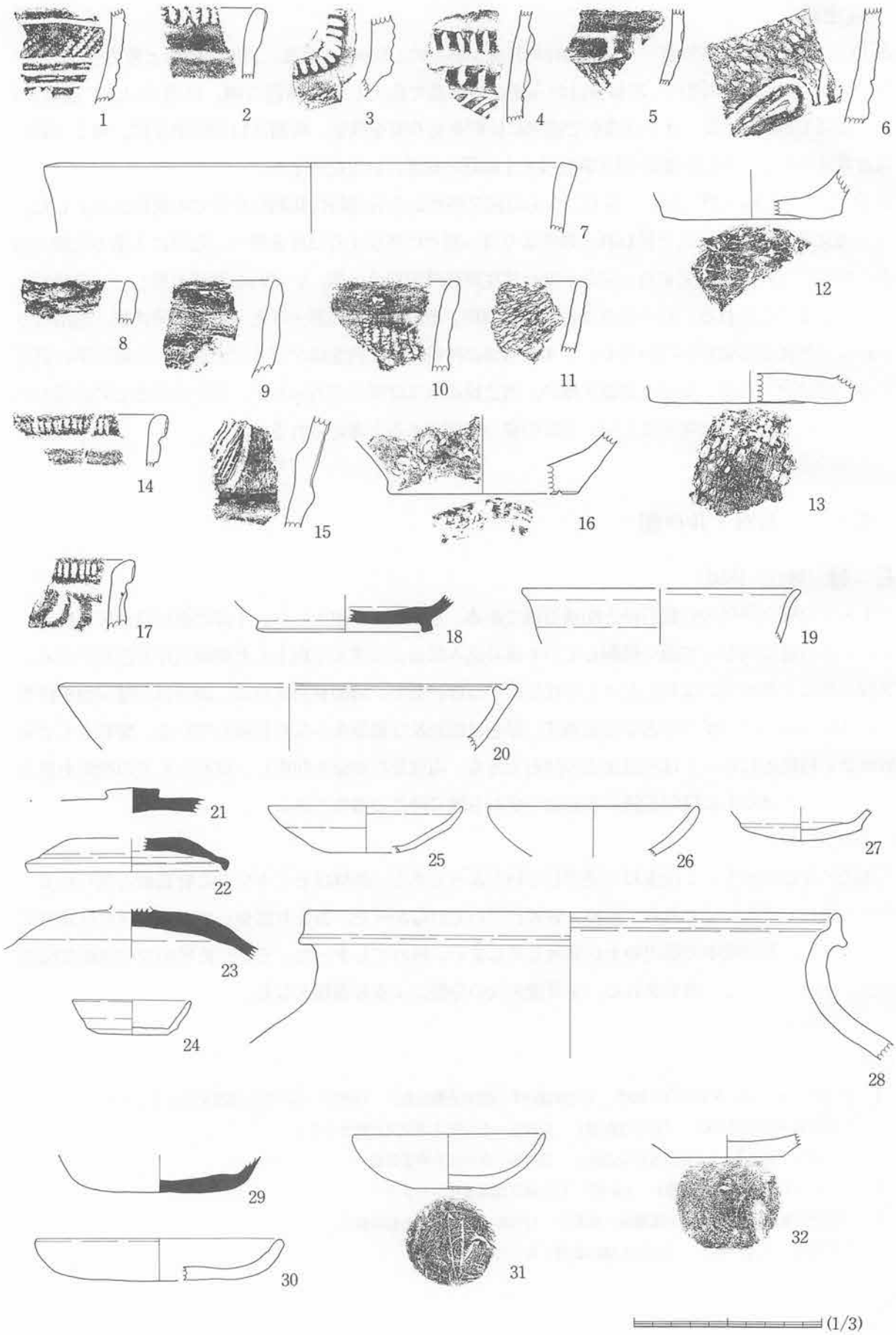
１・２は縄文時代の打製石斧と凹基石鏃である。ＳＤ12より出土した。１は両面に自然面を持つ。３と４は河道に向かって緩く傾斜していく落ち込み部分より並んで出土した磨製石斧と凹石である。磨製石斧は刃部が刃こぼれしたような状態だがほぼ完形で、両面整形される。側面は明瞭な面を持ち断面は膨らみを持つ長方形となる定角式。凹石は両面及び側面をかなり利用している。磨石としてもあわせて利用される。５は河道出土の凹石である。両面及び側面を利用し、磨石としての使用も見られる。６・７はともに打欠石錘。石器はいずれも縄文時代の遺物である。

井戸側（第18図）

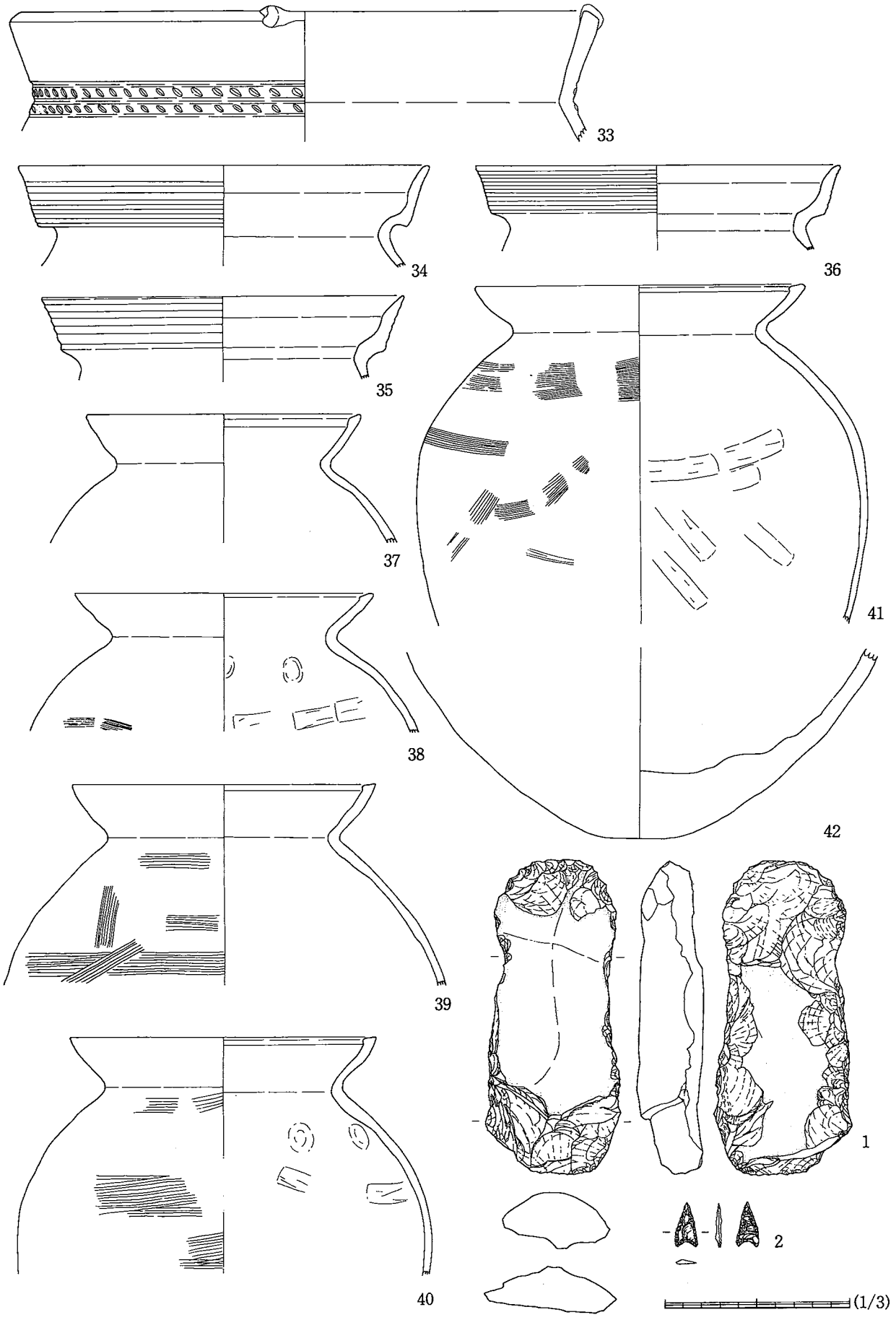
Ｂ区・ＳＥ02出土。２段重ねで使用していたようである。部材はヒノキなどの針葉樹と見られる。樺皮を通して綴合わせてある。蓋板・底板は付いていなかった。あまり腐食しておらず残りは非常によかったが、掘削途中で周辺の土が崩落してしまい、壊れてしまった。そのため現地での詳細な図面がとれなかったことが悔やまれる。宇野隆夫氏の分類によるＢⅧ類となる。

〈参考文献〉

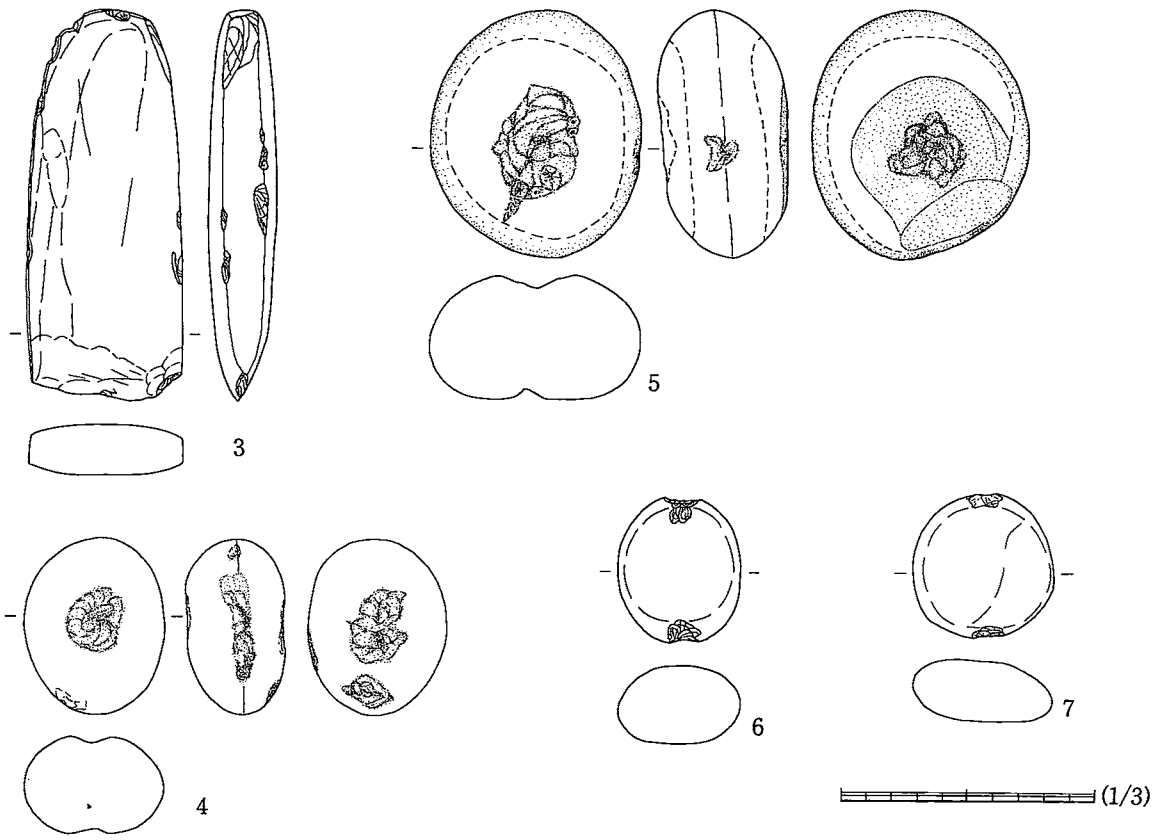
1　木立雅朗・沢田まさ子・白田義彦　『北塚遺跡第13次調査報告書』　1994年　石川県立埋蔵文化財センター
2　三浦純夫・戸澗幹夫他　『北塚遺跡群』　1985年　石川県立埋蔵文化財センター
3　荒木繁行・南久和　『金沢市北塚遺跡』　1977年　金沢市教育委員会
4　垣内光次郎　『普正寺遺跡』　1984年　石川県立埋蔵文化財センター
5　『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』　1992年　北陸中世土器研究会
6　宇野隆夫　「井戸考」　『史林』第65巻第５号　1982年

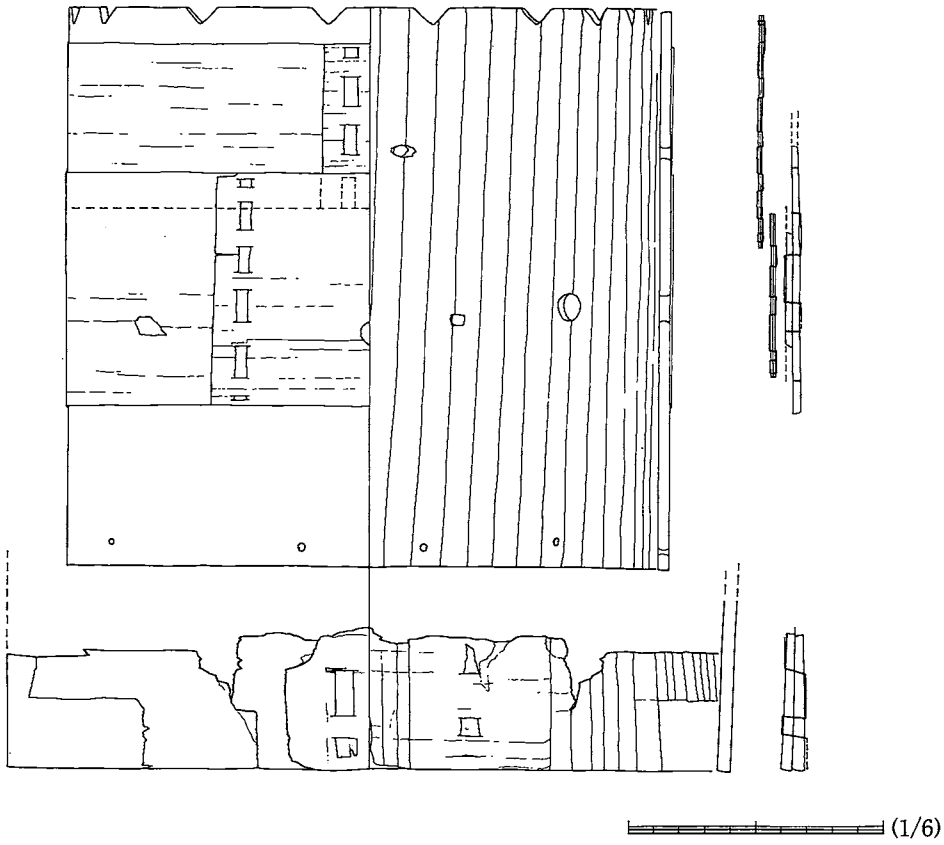


第16図　出土遺物実測図(1)



第17図　出土遺物実測図(2)





第18図　出土遺物実測図(3)

図No.	出土地点	器　種	調整・文様	色　調	胎　土	備　　考	No.
1	河道			淡褐	砂礫・焼土	煤　縄文土器	10
2	河道		貝殻腹縁文	灰褐		縄文土器	12
3	河道			黒褐		炭化物　縄文土器	13
4	河道			黄褐	焼土	縄文土器	14
5	河道			黒褐	砂礫・焼土	内赤彩　炭化物　縄文土器	11
6	河道			赤褐		煤　縄文土器	15
7	河道			灰白	砂礫	縄文土器	32
8	河道		指なで	黄褐	砂礫・焼土	煤　縄文土器	
9	河道			黄褐	焼土	縄文土器	34
10	河道		縄文	黄橙	砂礫・焼土	縄文土器	17
11	河道		撚糸文	灰褐	砂礫・焼土	煤　縄文土器	19
12	河道			灰褐	砂礫	底部　縄文土器	37
13	河道		網代圧痕	黄橙	砂礫・焼土	底部　縄文土器	16
14	落ち込み		貝殻腹縁文	黄橙	海綿	縄文土器	35
15	落ち込み		葉脈状文	黄橙	砂礫	縄文土器	6
16	落ち込み			黄褐	砂礫・焼土	底部　縄文土器	8
17	A－SD02		貝殻腹縁文	灰黄	焼土・海綿	縄文土器	7
18	A－SD06	杯				須恵器	26
19		碗		青灰		青磁	28
20	B－SD03	浅鉢		黄褐	海綿	縄文土器	
21	B－SD10	杯蓋		灰		須恵器	21
22	B－SD10	杯蓋		黒灰		須恵器	
23	B－SD10	杯蓋		灰		須恵器	48
24	B－SD10	小型杯		暗灰		灰釉陶器	46
25	B－SD10	椀		黄橙	焼土	土師器	22
26	B－SD10	椀		黄橙	焼土	土師器	
27	B－SD10	椀		黄橙	焼土	土師器	50
28	B－SD10	甕				加賀焼	19
29	C－SD05	杯		灰		須恵器	27
30	C－SD05	皿		黄橙		土師器	
31	C－Pit03	椀		淡黄橙	焼土	土師器	24
32	C－SK01	椀			焼土	底部　土師器	39
33	A－SD12	深鉢		褐	砂礫・焼土	縄文土器	38
34	A－SD12	甕	擬凹線	淡黄	砂礫S少	土師器	45
35	A－SD12	甕	擬凹線	黄褐	砂礫S多	土師器	30
36	A－SD12	甕	擬凹線	淡黄		土師器	
37	A－SD12	甕	ハケメ　ケズリ	黄褐	砂礫S多・M少	土師器	40
38	A－SD12	甕	ハケメ　ケズリ	淡黄	砂礫S多	土師器	42
39	A－SD12	甕	ハケメ　ケズリ	淡黄	砂礫S多・M少	土師器	43
40	A－SD12	甕	ハケメ　ケズリ	淡黄	砂礫S・M少	土師器	41
41	A－SD12	甕	ハケメ　ケズリ	にぶい淡橙	砂礫S・M少	土師器	39
42	A－SD12	甕		淡黄	砂礫M多い	底部　土師器	44

第2表　土器観察表

No.	出土地点	器　　種	長さmm	幅　mm	厚さmm	重量g	備　　考
1	A－SD12	打製石斧	172	72	34	505	
2	A－SD12	石鏃	25	11.5	2.5	0.65	
3	落ち込み	磨製石斧	153	61.5	27	512	
4	落ち込み	磨石　凹石	69.5	56	38.5	155	
5	河道	磨石　凹石	98	84.5	49.5		
6	C－SD05	石錘	56	55	24.5	116	
7	B－SD21	石錘	57	49	31	124	

第3表　石製品観察表

第5章　おわりに

北塚遺跡は明治から大正にかけての大規模な耕地整理に伴い縄文時代の遺跡としてその存在が確認されており、その発掘調査は1951年に石川考古学研究会により行われたのを皮切りに今回で第17次調査となる。過去の調査については既刊の「北塚遺跡群」(1985年石川県立埋蔵文化財センター)、「北塚遺跡第13次発掘調査報告書」(1994年石川県立埋蔵文化財センター）を参照していただきたい。

ここではこの調査で確認された各時代ごとにまとめてみたい。

縄文時代

北塚遺跡は縄文時代中期後葉北塚式の標識遺跡として周知される。過去の調査においても縄文の遺構、遺物が多く確認されている。今回の調査では第13次調査で確認された河道の一部が検出された。調査前はこの河道は調査区外に位置すると考えていたが、河道右岸肩部と肩部へ向かう落ち込みが確認され、予想以上に河道が蛇行していることが判明した。この河道は貯木場としての性格が考えられているが、今回は木製品等は確認されなかった。出土遺物は河道より、一部中期中葉から後期にかけての縄文土器、肩部の落ち込みより磨製石斧、凹石が出土している。他にＳＤ12から打製石斧、石鏃がみられた。ＳＤ12は縄文時代の遺構ではないため２次的な混入と見られる。河道の西岸側からは過去の調査において縄文時代中期後葉の集落跡が検出されている。しかし対岸となる東岸側においては、今回の調査も含め広い範囲の調査が行われているにもかかわらず、縄文時代に該当すると思われる遺構の検出はほとんど見られない。

弥生時代

弥生時代の北塚については弥生時代の遺物は出土している。しかし、ほとんどが遺構につくものではない。周溝から出土する弥生土器は、弥生時代の遺物包含層を切り込んで周溝を掘削した結果として、２次的混入により検出されるようである。

古墳時代

北塚古墳群は明治以降の耕地整理により既に墳丘が削平されているため現地形により古墳の存在を知ることは不可能である。小規模ながらも数次にわたる発掘調査によりその規模は明らかになりつつある。現在までに確認された古墳は16基（８基分は未報告）を数え、墳丘が削平を免れているおまる塚古墳、宇佐神社古墳を含めると18基となる。今回の調査は前年に行われた第16次調査の調査区の南側に隣接している。16次調査では４基の古墳の周溝を検出しており、うち１基の周溝は今回の調査区へと延長していることが当初から予想された。結果、外径約24mの円墳であることが判明した。周溝は幅５ｍ・深さ50㎝で断面は台形を呈しており、墳丘側はなだらかに、外側は真っ直ぐに立ち上がる。外径が20mを越える規模の古墳は過去の調査においても11次調査で１基、今回調査された円墳、おまる塚古墳、宇佐神社古墳である。ただし11次調査において検出された８号墳は周溝の全体の約５分の１程度しか確認されておらず円墳と断定はされていない。調査時の遺物の出土状態等より前方後円墳の可能性も示唆されている。周溝を含めた規模が20mを越える円墳（または前方後円墳）の周囲に10～15m前後の小規模な円墳または方墳が、かなり隣接していながらも、切り合い関係を持つこと

なく築造されている。古墳の築造年代は今回は確認できなかったが、8次調査では5世紀後半代を示す須恵器が出土している。16次調査においてほぼ同時期とされる土師器・須恵器が方墳の周溝から出土している。方墳と円墳、ほぼ2タイプに分かれる墳丘規模、がそれぞれどのような関係になるかは今後の検討課題となろう。

古　代

今回の調査では古代に属すると断言できる遺構は確認されなかった。過去の調査においても、平安時代の遺物は大量に出土しているが河道への廃棄という形であり、集落の明確な位置はわかっていない。第2次調査においては平安時代後期と見られる遺物が多く見つかっている。また1点ではあるが布目瓦の破片が出土している。今回出土した9世紀代と見られる灰釉陶器は、須恵器には該当する小型杯は存在するが灰釉にはほとんど見られない器種である。ただしこれはＳＤ21の覆土よりの出土で、ＳＤ21を埋め戻すときの混入と思われる。11世紀代の土師器の椀がピット内から逆位の状態で置かれたものが見つかっている。口縁部を一部欠いているが完形に近い状態で出土している。建物の廃棄に伴う地鎮行為として柱穴内等に土師器を埋納する例は10～11世紀代になると多く見られるようになる。1点から数点といった数量で、1ないし2種類の器種で構成されている。北塚遺跡の場合も同様で、前田清彦氏の土器祭祀の分類でＤ型となる。Ｄ型は建物単位での小規模な祭祀が行われたとされる。

北塚遺跡の古代の様子についてはまだはっきりとしない状態であるが河道の右岸を中心として展開していたと予想される。

中　世

中世と考えられる遺構は井戸、断面形態が逆台形をした溝があげられる。溝は深さが約1ｍで覆土は地山質土をブロック状に含む。人為的に埋め戻された痕跡が伺え、縄文時代、古代、中世の遺物を包含している。屋敷地などを区画する溝とも考えられる。ただし幅2ｍの調査区という制約のためこの溝がどのような方向をとっていくのかは不明である。井戸はこの溝を切り込むようにして掘られており、井戸枠として曲物を使用している。覆土中からは、15世紀を中心とする遺物が出土している。

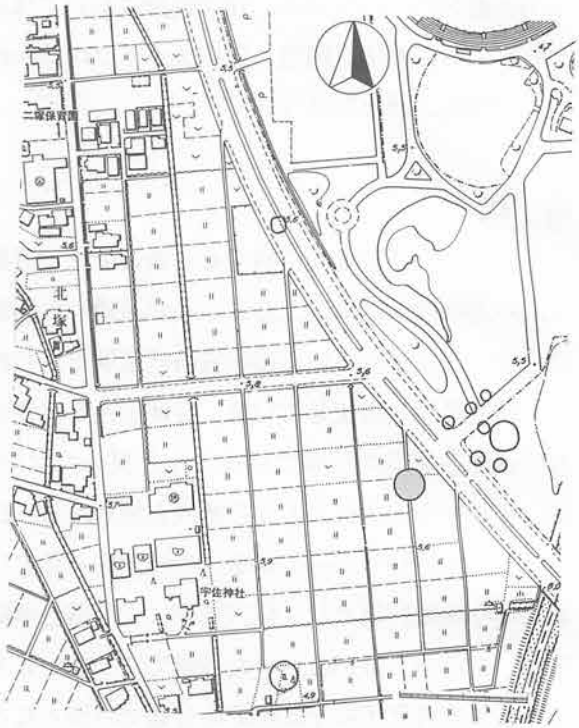
〈参考文献〉

1　滋井眞・西野秀和　『北塚Ｂ遺跡（第Ⅱ次調査）』　1980年　石川県立埋蔵文化財センター

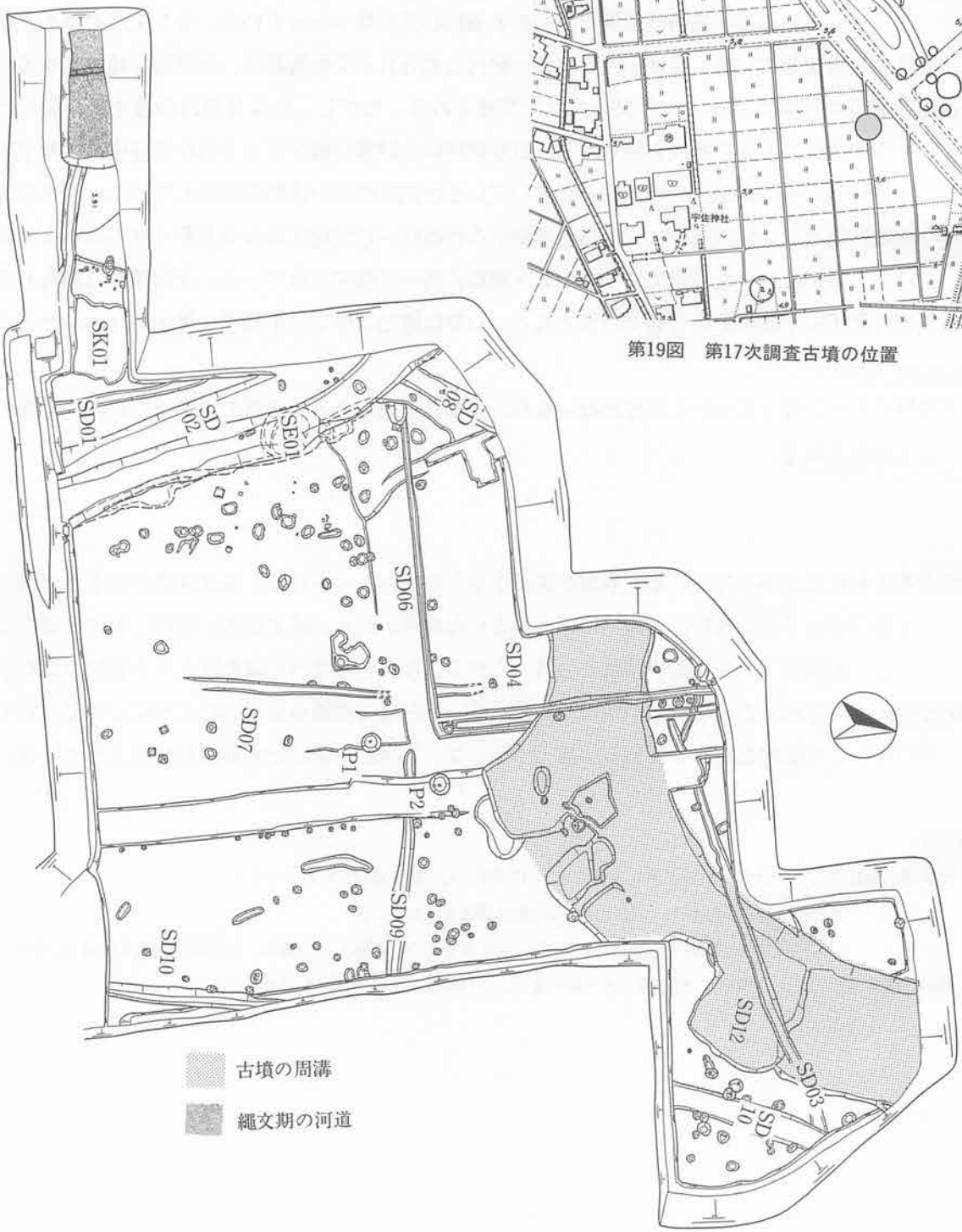
2　垣田修児　「まとめ」『北塚遺跡群』　1985年　石川県立埋蔵文化財センター

3　本田秀生　「掘立柱建物の柱穴内土器埋納について」『佐々木ノテウラ遺跡』　1986年　石川県立埋蔵文化財センター

4　前田清彦　「土器祭祀の様相」『松任市三浦・幸明遺跡』　1996年　松任市教育委員会



第19図　第17次調査古墳の位置



第20図　河道・周溝位置図（S＝1／200）

A区　調査前風景(北西より)

C区　調査前風景(東より)

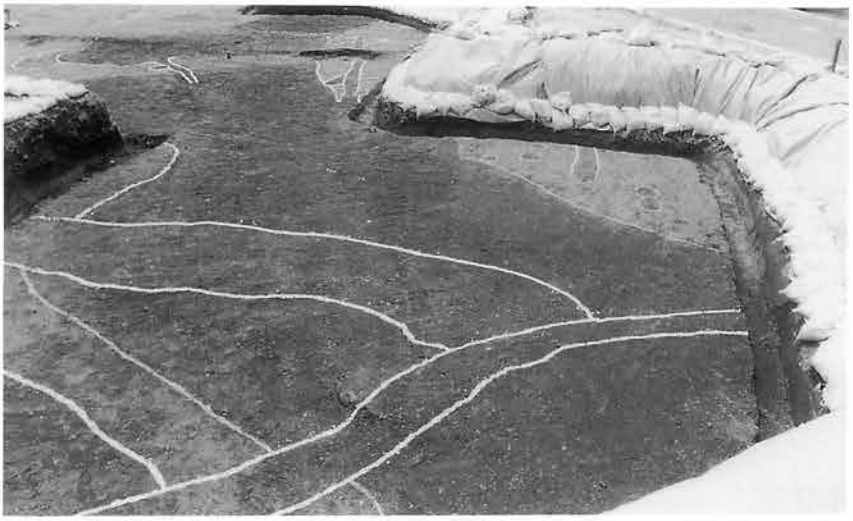
A区　表土除去

A区　SD02(南より)

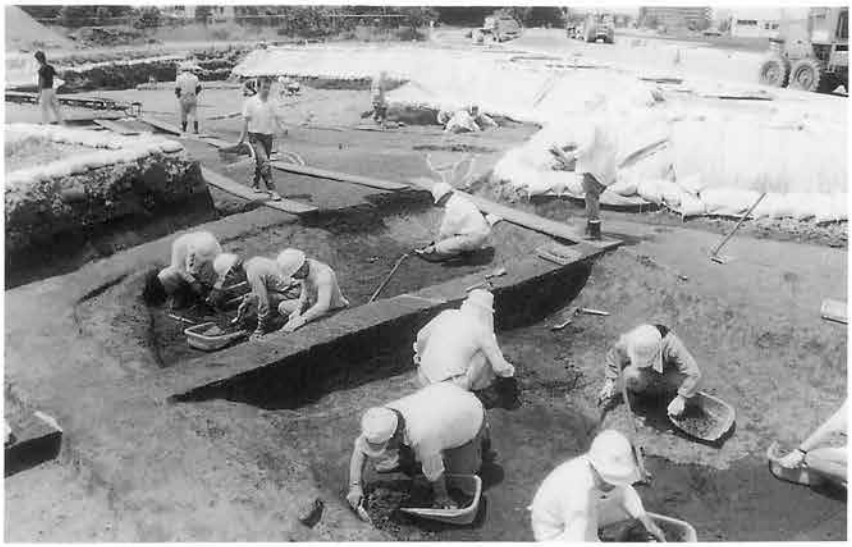
A区　SD09(東より)

A区　SD10(南より)

A区　SE01(南より)

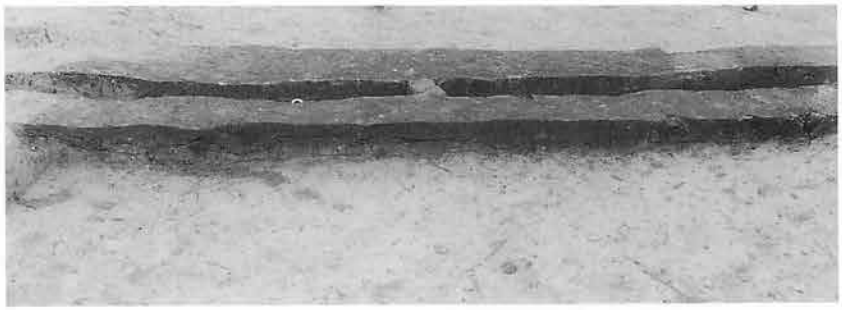


A区　SD12(周溝)
検出状況(北東より)

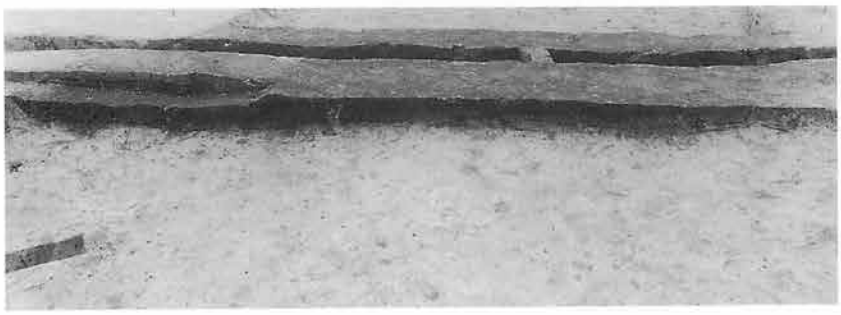


A区　作業風景

A区　SD12完掘状況

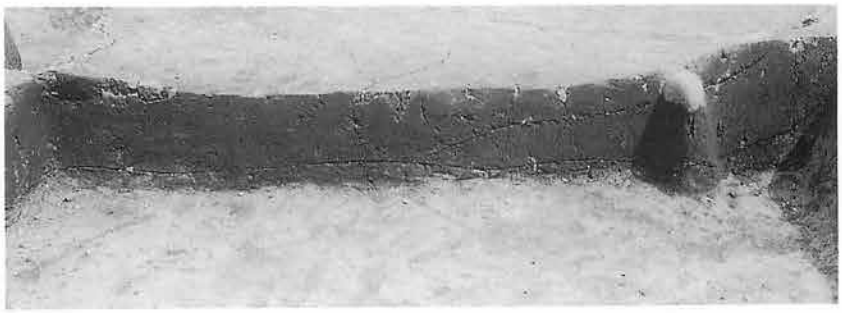


A区　SD12(西より)



A区　SD12(東より)

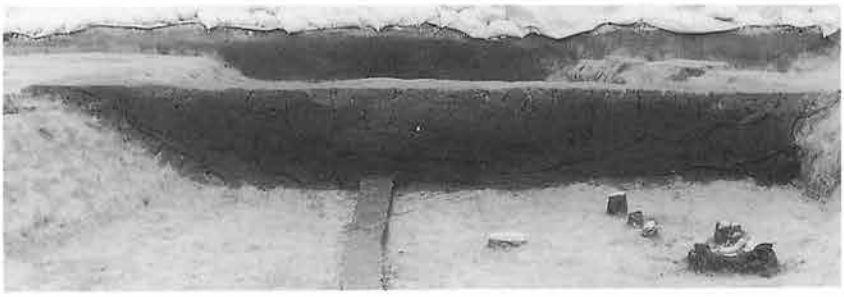
A区　SD12(南東より)



A区　SD12(北西より)

A区　SD12(南西より)

SD12(北より)

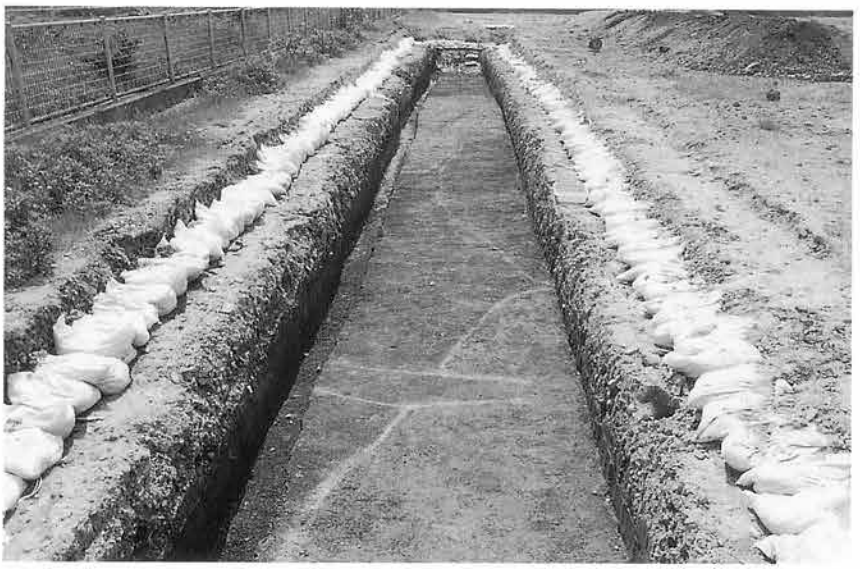


SD12(南より)

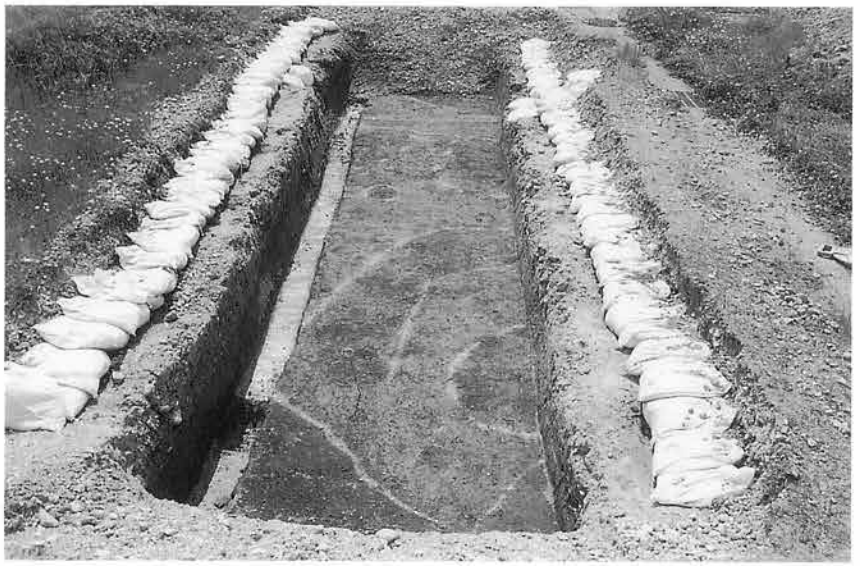
A区　Pit1(西より)

A区　SD02礫群(南より)

A区　土器出土状況



B区　検出状況(東より)
(西側)



B区　検出状況(東より)
(東側)

B区　SK01礫群(西より)

B区　完掘状況(東より)
(西側)

B区　完掘状況(東より)
(東側)

B区　Pit群(東より)

C区　検出状況(東より)
(西側)

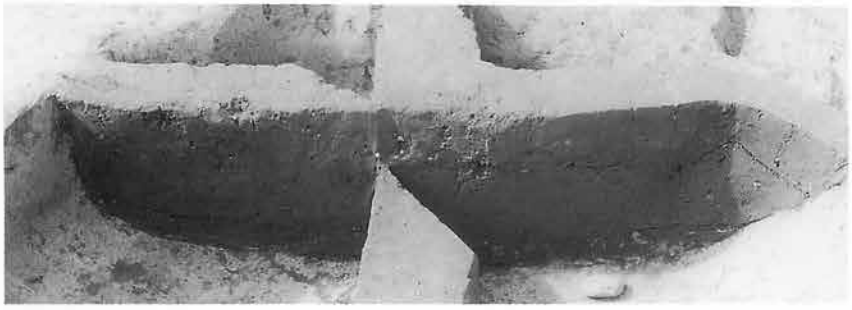
C区　検出状況(東より)
(東側)

C区　Pit3 土器出土状況

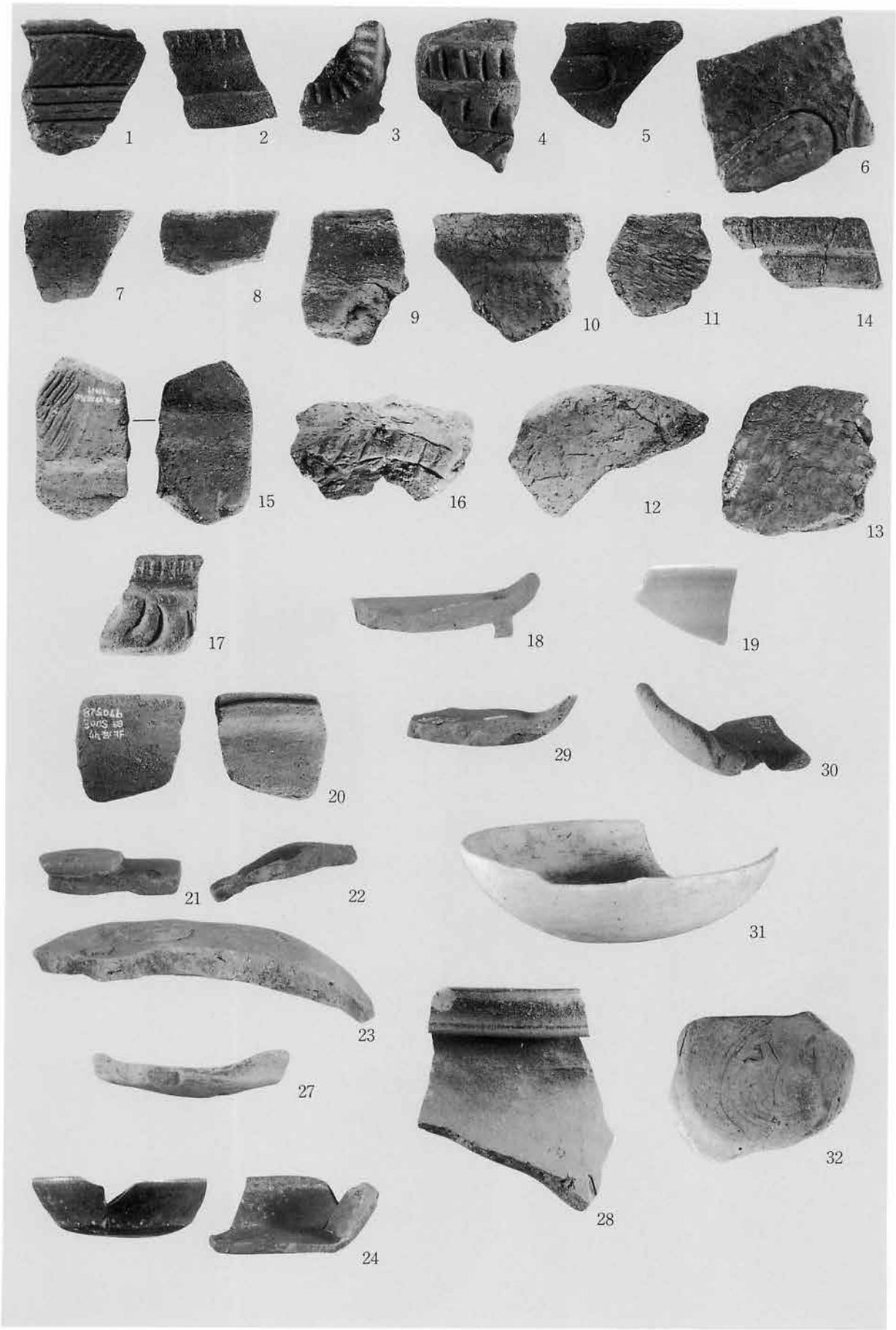
C区　完掘状況(東より)
(西側)

C区　完掘状況(東より)
(東側)

C区　SK05(西より)

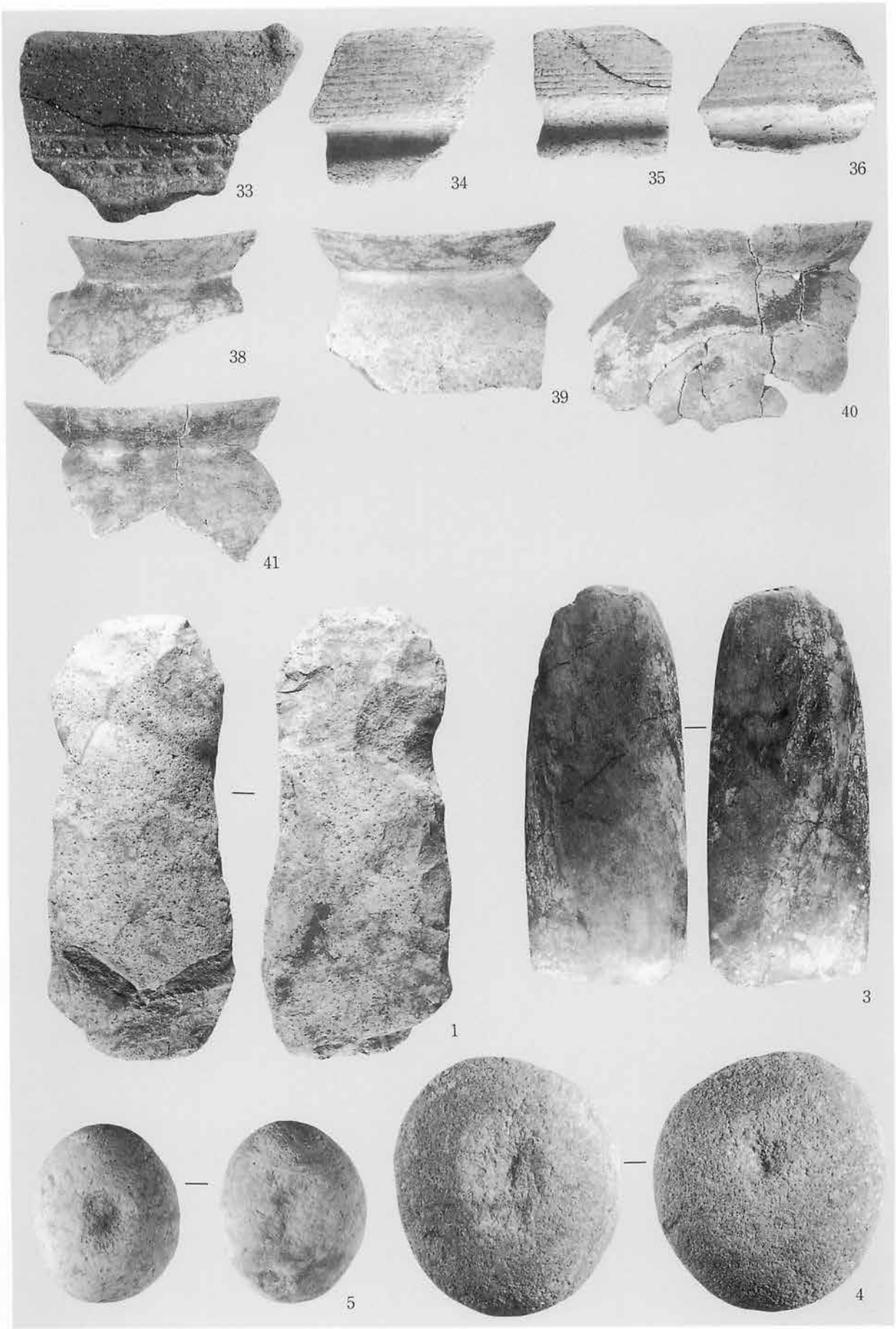


C区　SK05(南より)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
14
15
16
12
13
17
18
19
20
29
30
21
22
31
23
27
32
28
24

A～C区　出土土器

図版12



A区　出土土器、石製品

A・B区　出土 石・木製品

報告書抄録

ふりがな	かなざわしきたづかいせき　きたづかこふんぐん
書名	金沢市北塚遺跡・北塚古墳群　第17次発掘調査報告書
副書名	西部緑地公園テニスコート整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
編集者名	宮川勝次　松浦郁乃
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921－8044　石川県金沢市米泉町４丁目133番地　TEL076－243－7692
発行年月日	1998年３月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				㎡	
北塚遺跡 北塚古墳群	石川県金沢市 北塚町	17201	01088 01087	36° 34′ 05″	136° 36′ 10″	970506 ～ 970717	650	テニスコート整備

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北塚遺跡		縄文時代 古代 中世	河道 溝 井戸	縄文土器 須恵器 土師器 木製品	
北塚古墳群	古墳	古墳時代	古墳		

金沢市北塚遺跡・北塚古墳群
第17次発掘調査報告書
西部緑地公園テニスコート整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　日　1998（平成10）年3月27日

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
〒921－8044　石川県金沢市米泉町4丁目133番地
電話（076）243－7692（代）
FAX（076）243－8988

印　　刷　ヨシダ印刷株式会社
〒921－8546　石川県金沢市御影町19番1号